

第7章

インドにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの展開

——州政治とコミュニカル暴動——

近藤 則夫

序論

インド政治で「ヒンドゥー・ナショナリズム」の問題は今日大きな緊張を生み出す要因である。インドではヒンドゥー教徒が人口の約8割を占め圧倒的な多数派の地位にあるが、多数を占めるがゆえにその主張や価値観を当然のものとし、少数派に対して不寛容となる「多数派主義」(majoritarianism)は1970年代まではそれほど顕著ではなかった。ひとつには多大な犠牲をはらった分離独立の原因が宗教対立にあったことから、ネルー首相の国民会議派(以下「会議派」)政権のもとでは宗派間の対立が激化しないように大きな注意が払われていたからである。もうひとつは、ヒンドゥー社会がさまざまなカーストや地域性によって分裂が顕著で、そもそも「ヒンドゥー」として強くまとまるのが難しかったという状況がある。

しかし、分裂状況にあるがゆえに、ヒンドゥーを統合し、インドを多数派ヒンドゥーの国家としようとする運動は近現代史の底流に流れてきた。そのなかでもっとも重要な組織が1925年に生まれた「民族奉仕団」(Rashtriya Swayamsevak Sangh: RSS)である。RSSはヒンドゥー社会の改革運動のなかから生まれヒンドゥー社会の団結と強化をめざす運動体である。このRSSを母体としてさまざまな組織が設立されていく。1951年には政党組織として

「大衆連盟」(Jan Sangh)が設立された。これは1980年には「インド人民党」(Bharatiya Janata Party: BJP)となり、「ヒンドゥー・ナショナリズム」を推進する中心的政党となる。RSSはこのほかにも1964年にはヒンドゥー文化の普及と統合をめざす「世界ヒンドゥー協会」(Vishwa Hindu Parishad: VHP)、1984年には青年行動部隊である「バジュラング・ダル」(Bajrang Dal: BD、「ハスマーンの軍団」の意味)など多くの関連組織を設立している。これらは、RSSを中心とする「サング・パリヴァール」(Sangh Parivar = 「組織の家族」と呼ばれる。

「ヒンドゥー・ナショナリズム」を成長させるもっとも効率的な「動員形態」は宗派間の暴力の応酬であるところの「コミユナル暴動」である。「他者」との暴力的対立は分裂したヒンドゥー社会をもっとも効果的に束ねる。本章はインドの民主主義体制においてどのような条件がコミユナル暴動につながるのか、または抑制するのか探った論考である。この条件を分析するためには、インド社会の多様性のゆえに、州を単位とした分析が重要となる。インド全体レベルの分析では政治と社会の相互作用の実態に即した理解のためには適切ではないからである。具体的には「ヒンドゥー・ナショナリズム」の展開で重要な1990年代以降のマハーラーシュトラ州、グジャラート州、ウッタル・プラデーシュ(以下UP)州を分析する。この3州が選択された理由は、前2州については1990年代以降に最大規模のコミユナル暴動を経験した州であること、そしてUP州についてはこの州がアヨーディヤー問題を抱え独立以降コミユナル暴動の重要な震源地であったにもかかわらず近年大きな暴動を経験しておらず、前2州の比較ケースとして重要であるからである。

以下では第1節において研究の現状と問題の所在、そして、本章の出発点となるアヨーディヤー問題の概略を述べ、第2、3、4節で3つの州における政治とコミユナル暴動の関係を分析し、最後に議論をまとめる。

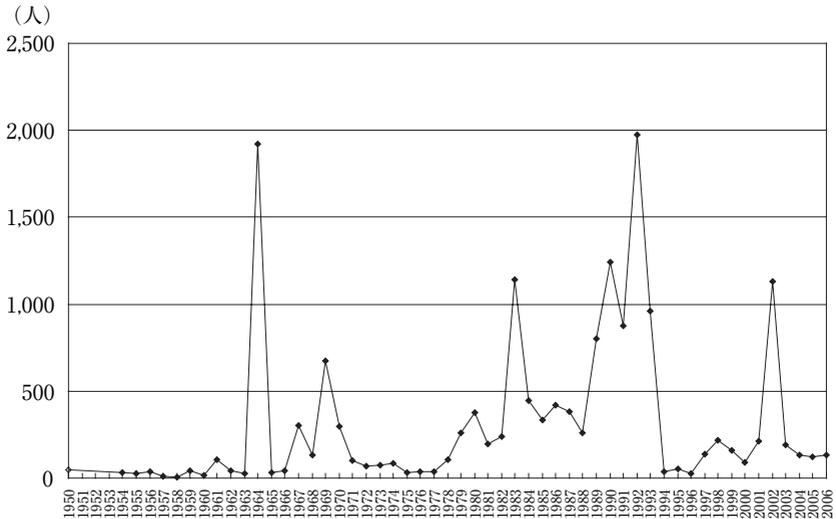
第1節 「ヒンドゥー・ナショナリズム」の展開と問題の所在

「ヒンドゥー・ナショナリズム」が存在感を増した理由のひとつは BJP の急速な成長であり、もうひとつはヒンドゥーとムスリムの間のコミュニカル暴動の拡大である。BJP は大衆連盟の時代は連邦下院選挙での得票率は10%を超えることはなく、獲得議席も1967年の35議席が最高であったが、1989年の選挙では得票率は11%、獲得議席は86となり、1990年代以降の選挙では得票率は2割以上、獲得議席も1998年と99年の選挙では182議席まで上昇した。コミュニカル暴動に関しては図1に示されるように1980年代以降、顕著な広がりを見せている。この節ではヒンドゥー・ナショナリズムにおけるコミュニカル暴動の重要性を研究のなかで位置づけ、問題の所在を定め、次に第2節以降の分析のコンテキストとなるヒンドゥー・ナショナリスト勢力による1992年12月6日のUP州アヨーディヤーの「バーブルのモスク」の破壊とそれに続くコミュニカル暴動までの経緯を説明する。

1. 「ヒンドゥー・ナショナリズム」研究と問題の所在

RSS, BJP などの勢力は現在「ヒンドゥー・ナショナリスト」と呼ばれる場合が多い。しかし、彼らがインド独立を戦った会議派のナショナリズムと区別され、そのように呼ばれるようになったのはそれほど古いことではない。たしかに RSS の「ヒンドゥー・ナショナリズム」の中心的概念である「ヒンドウトゥヴァ」(Hindutva) (Savarkar [1989]), すなわち「ヒンドゥー性」という概念が V・D・サヴァルカルによって唱えられたのは1923年であるが、従来ヒンドゥー社会を改革・統合し「ネーション」としようとする RSS の運動は「ナショナリズム」というよりも特定のコミュニティ⁽¹⁾を優先するだけの「コミュニナリズム」というラベルがあてはめられることが多かった⁽²⁾。それは「ヒンドウトゥヴァ」があくまでヒンドゥー中心の概念であり、ムス

図1 ヒンドゥーとムスリムのコミューナル暴動による死者数



(出所) 1995, 1996, 1997, 2000年については Engineer [2004: 224] が新聞報道からまとめたもの。そのほかは基本的に Ministry of Home Affairs のデータであるが、以下の資料から採録した。Engineer [2004: 223-224], Rajya Sabha [2000], Lok Sabha [2004, 2005], Ministry of Home Affairs (Govt. of India) [2007: 37]

(注) 研究者の間では政府資料における基準のとりかた、正確性に疑問を投げかけるものも多い。しかしたとえば、Wilkinson ed. [2005: Appendix] などの新聞報道にもとづく集計をみても、大まかなトレンドは似通っていると見てよい。

リムやクリスチャンなどを排除し、したがって、ヒンドゥー・コミュニティによる多数派の専制につながるものと考えられたからである。また、RSS 勢力や大衆連盟の影響力は狭い範囲に限られていたこともある。

しかし、1980年代末以降 BJP がその影響力を拡大するとその評価も変わってくる。すなわち、分裂しているヒンドゥーの支持をまとめ、政治的には権力の座に着きうる可能性が現実になると、ヒンドゥーが多数派であるだけに、特定宗派中心の「コミューナリズム」という偏狭な概念よりも、より包括的な「ナショナリズム」という概念を適用する研究者が多くなる。ヒンドゥーのコミューナリズムが「多数派のコミューナリズム」(Basu et al. [1993: 2]) であり、かつ、それが中央権力に接近しうる勢力であることが明白になったこ

とが、「ナショナリズム」と評されるようになった大きな要因と考えられる。逆にいえば「コミュニナリズム」と「ナショナリズム」の境界はそれほど画然としているものではない⁽³⁾。

そもそも「ナショナリズム」とは、ゲルナー、アンダーソン、スミス、ホブズボームなど西欧の研究者の考え方に従えば、近代化の過程で文化共同体と政治共同体の境界を一致させ「ネーション」を成立させる運動であるとされる(ゲルナー [2000 (1983): 1])。それはスミス [1998 (1991)] の「エスニー」、あるいは、ホブズボーム [2001] の「プロト・ナショナリティ」などと概念化される特有の歴史的過去や神話を起源として「ネーション」に成長する文化共同体の核をもつ。ナショナリズムが成功しネーションを生み出すためには、その内に抱えるさまざまな社会階層の統合を進める必要があり、そのため人工的な共同体意識を成員すべてにもたせる必要がある。近代化が重要なのはこの局面である。近代化は画一的な教育の普及や制度的基盤の確立をともない人工的な共同体意識を成立させる基盤を作り出すからである。そこにおいて「人工的」な共同体意識という側面を強調すれば、成功したナショナリズムが作り出すネーションは「想像の共同体」(アンダーソン [1987 (1983)]) ともいえよう。このような意味での「ネーション」を生み出すナショナリズムの一般的特徴は「ヒンドゥー・ナショナリズム」にもみられる。それが「コミュニナリズム」という概念を包み込むような形で「ヒンドゥー・ナショナリズム」概念が今日多くの研究者に使用されている大きな理由であろう。

以下「ヒンドゥー・ナショナリズム」研究を概観するが、それが急成長した前提を整理する必要がある。すなわち、長年政権を担当してきた会議派が社会経済開発に大きな成果をあげられず人々の信頼を失い選挙で後退していったこと、それと並行的に会議派政権の恩恵を従来あまり受けてこなかったため独自の政治的代表的を求める社会階層、とりわけ「その他後進階級」(Other Backward Classes: OBC)⁽⁴⁾といわれる階層が社会的、政治的に力を増し、地域政党の成長を促したこと、である。きわめて単純化すれば、会議派の後

退と OBC などの政治的成長に支えられた地方政党の成長が、中央政治レベルで「政治的真空」を作り、それを BJP などヒンドゥー・ナショナリストが時には暴力的手段によって利用したことが1990年代以降のその急速な成長を説明するものとなる。

会議派の衰退については、マナー (Manor [1997]) やコーリー (Kohli [1990]) などの研究が代表的なものであるが、会議派退潮の政治社会的底流として開発の失敗という要因と並んで、OBC の成長という要因がある。OBC の政治的進出に関しては留保制度との関係で論じられることが多いが (Béteille [1985], Galanter [1984], Kondo [2001]), 重要なポイントはそれが政党政治の次元では地方政党の成長の中身を構成しているという点であろう。そのような意味において州政治研究の多くは実際上 OBC の政治を扱っているといえる。本章の関係するマハーラーシュトラ州に関してはカラス (Caras [1972]), レーレー (Lele [1990]), アットウッド (Attwood [1992]), パルシカル (Palshikar [1996]) などの研究, グジャラート州に関してはシャー (Shah [1990, 1996, 2007]) やシェート (Sheth [1998]) の研究, そして UP 州に関してはブラス (Brass [1984, 1985]) やハサン (Hasan [1998]) などの研究がそのようなプロセスに焦点をあてている。これらの研究のひとつの焦点は OBC がいかにして影響力を拡大してきたかという点の分析である。これらの研究によると、マハーラーシュトラ州とグジャラート州では OBC の台頭はある局面では会議派へ取り込まれる面もあったが、他の局面では地域政党や BJP に取り込まれる場合もあり、そのことが州政治を流動化させている。それはとくにグジャラート州についていえる。一方、UP 州では OBC の台頭は従来会議派政治に取り込まれなかった勢力の台頭であり、それは結果的に会議派の支持基盤を掘り崩すことになった。

一方、「ヒンドゥー・ナショナリズム」の政治に関する研究については、1980年代まではそれほど多くはない。バクスター (Baxter [1969]) やアンダーソンとダムレー (Andersen and Damle [1987]) が代表的なもので RSS の展開や大衆連盟/BJP の成長の過程を分析している。多くの優れた研究が発表

されるようになったのは、1980年代以降の BJP の急速な影響力の拡大と、ヒンドゥーとムスリムの間のコミュニカル暴動の大規模化が契機となっていると思われる。

BJP の成長はヒンドゥーとほかの宗派、とりわけムスリムとの社会的緊張を高め、コミュニカル暴動の可能性を高める。逆にコミュニカル暴動は会議派などの既存与党の威信を掘り崩し、同時に「他者」の脅威といった単純化されたアピールを浸透させ宗派間の社会的亀裂を深めることによってヒンドゥー社会の多様な集団の BJP への支持を拡大する。このような BJP の成長とコミュニカル暴動の互いが互いを強化する過程が、1992年12月6日の UP 州アヨーディヤー (Ayodhya) のバブリ・マスジッド (= 「パーブルのモスク」) のヒンドゥー勢力による破壊とそれに続くコミュニカル暴動に帰結する。そしてそのようなヒンドゥー・ナショナリズムの拡散こそが従来 of 会議派的な政治、すなわち、高カーストや、指定カースト (SC) / 指定部族 (ST)、そしてムスリムなど宗教的「少数派」⁵⁾などの幅広い階層の支持を集め社会的妥協を引き出すタイプの政治、の有効性を大きく損ね、社会的不寛容と緊張を高めた。これが多くの研究者の注目を引きつけた基本的理由である。

コミュニカルリズムやヒンドゥー・ナショナリズムについての1980年代以降の研究としては以下のようなものが挙げられるであろう。まず、歴史や思想面では、その複雑に絡み合った歴史的出自を論じた小谷 [1993]、サング・パリヴァールやマハーラーシュトラ州のコミュニカルな地域政党であるシヴ・セナー (Shiv Sena: SHS)⁶⁾の展開を分析した内藤 [1998]、宗教や思想的な面から接近したビドゥワイほか編 (Bidwai et al. eds. [1996]) や、近藤光博 [2002]、中島 [2005] などがある。一方、政党政治の次元から BJP の成長を分析したものとしてマリックとシン (Malik and Singh [1994]) や、近藤則夫 [1998]、および、ゴーシュ (Ghosh [1999]) などがあるが、ゴーシュの研究はとりわけ包括的である。しかしながら歴史、思想史、政治分析の次元で運動を統合的にもっとも洗練した形で捉えているのはジャフレット (Jafrelot [1996]) であろう。ヒンドゥー自らの脆弱性の裏返しとして対抗する

「他者」を作り上げ、それに対抗するものとして多数派「ヒンドゥー」のアイデンティティを形成させ、政治的影響力を拡大させる、という分析はジャフレットの独創的な考え方ではないが、ジャフレットの分析はもっとも洗練された定式化であるといってよい。そのほか、特徴的な研究としては、州レベルにおけるヒンドゥー・ナショナリズムの広がり进行分析したハンセンとジャフレット編 (Hansen and Jaffrelot eds. [1998]), ヒンドゥー・ナショナリズムと社会階層の関係を分析したハンセン (Hansen [1999]) などが挙げられる。

以上の諸研究はアヨーディヤー問題を焦点とするヒンドゥー・ナショナリズムの拡大をどう理解するか、という点で共通の問題意識をもつ。この点で重要なのはコミユナル暴動の位置づけである。コミユナル暴動は狭い地域や社会階層を超えて、宗教的「他者」を析出せしめ、ヒンドゥー・ナショナリズムを強化するからである。

ヒンドゥー・ナショナリズムの拡大におけるコミユナル暴動の重要性は多くの研究者に認識されている。コミユナル暴動の統計を整備し、その類型化を試みたラジゴパル (Rajgopal [1987]), アヨーディヤー運動の展開がいかに暴力的なプロセスと絡みあっているかを分析したマクガイヤほか編 (McGuire et al. eds. [1996]) やナンディほか (Nandy et al. [1997]), コミュナル暴動が都市部で多発する条件を探り、コミュニティ内の凝集性は強いがコミュニティ間のつながりが弱い場合に暴動が起こりやすくなるとしたヴァーシュネイ (Varshney [2002]), 地方の社会的ネットワークの存在がコミユナル暴動などを局地化するうえで重要とするカウル (Kaur [2005]), 主要なコミユナル暴動を網羅的にカバーしたエンジニア (Engineer [2004]), 選挙政治とコミユナル暴動の関係を統計的に分析して地域的な選挙政治が生み出す政治的インセンティブが宗派間の分極化やコミユナル暴動を引き起こすとしたウィルキンソン (Wilkinson [2004]), 現代のコミユナル暴動は「自然発生的」に起こるのではなく、それによって利益を得る勢力、すなわちヒンドゥー・ナショナリスト勢力などが「引き起こす」ものとしたブラス (Brass [2003])

などの研究が代表的なものである⁽⁷⁾。

以上の諸研究から、まず、開発の失敗、および、OBCの影響力の拡大と地方政党の成長が会議派の後退をもたらし、それがヒンドゥー・ナショナリスト勢力が拡大する隙間を広げたこと、そしてそのような状況下で1980年代なかば以降アヨーディヤー問題をシンボルとするヒンドゥーの動員戦略がサング・パリヴァールなどによってとられたことがコミユナル暴動が深刻化する大きな要因となったことがわかる。コミユナル暴動はヒンドゥー・ナショナリズムを拡散させ、両者は相互に強め合う関係になっている。一方、コミユナル暴動研究から、暴動は、従来はおもに都市部の現象であること、宗派コミュニティがおかれている社会関係が重要であること、選挙など政治の動きと密接な関係にあることなどがわかるが、本章との関連で重要なのはプラスの研究である。

プラスの主張をやや詳細に述べると、プラスはミクロなフィールドワークにもとづく緻密な研究によって、コミユナル暴動はそれによって利益を受けるものが人為的に生みだすもの、つまり、きわめて政治的なものとし、それを「制度化された暴動システム」(institutionalized riot systems)と名付けている。本章の主題である州政治とコミユナル暴動の関係を考えるうえではこれが重要である。1992～93年のムンバイ、そして、2002年のグジャラート州のコミユナル暴動ではヒンドゥー・ナショナリスト勢力が組織的に関与したことは明らかである。そして彼らが関与した動機のひとつは州政治にインパクトがあることを期待したからであった。とくに2002年のグジャラート州の暴動の場合はそれが顕著であった⁽⁸⁾。近年の大規模なコミユナル暴動は「制度化された暴動システム」を介して州政治の動きと関連している面が強いのである。本章が明らかにしたいのはこの点である。

具体的には州政治のどのような条件がコミユナル暴動およびその大規模化につながるのか、または、抑制するのか、そしてコミユナル暴動の州政治へのインパクトは何なのかを探ることである。そのためには「制度化された暴動システム」の動きを把握する、すなわち、限られた時間内に起こるコミュ

ナル暴動を解きほぐして理解する必要がある。もし、「制度化された暴動システム」が存在したとしたら、時間的に凝縮された形で起こる暴動で、何が発端となり、どのような勢力が暴動を深刻化させ、州政府の態度はどうであったかということ把握することが、そのメカニズムを理解するためには重要である。以下のマハーラーシュトラ州とグジャラート州の分析で暴動の推移を詳述するのはそのためである。また大規模なコミユナル暴動が発生した州と、暴動を発生させる潜在的要因はあるが、実際には発生を許していない州との比較も必要となる。これらの点をふまえると、大規模暴動の発生したマハーラーシュトラ州とグジャラート州の分析は、必要に応じてコミユナル暴動を焦点とする州政治のコンテクストにまず触れ、次に暴動の推移の詳細な説明、暴動の州政治へのインパクトという形で進むことになる。それに対して大規模暴動が対象期間中になかったUP州は、コミユナル暴動を焦点とする州政治のコンテクストの説明、そして、それがなぜ抑制されているのかの説明という順で進むことになる。このような作業を通じて、どのような条件がコミユナル暴動につながるのか、または抑制するのか探ることができる。次の節以下で各州の分析に入る前に、以下でアヨーディヤー問題の形成を説明しておく必要がある。

2. 会議派の退潮とヒンドゥー・ナショナリズムの拡大

——アヨーディヤー問題の形成——

会議派は経済運営の失敗や OBC の台頭などによりその人気は1970年代中頃に急低下し、「非常事態宣言」(1975~77年)により民主主義を停止しなければ政権を維持できない事態に陥った。その後政権復帰した1980年以降も支持基盤は安定せず、そのために次第に多数派ヒンドゥーの宗教感情に訴え人気を維持する方向性をみせはじめる⁽⁹⁾。

このように宗教感情を政治的に利用することに対する抵抗感が次第に薄らいでいく政治状況で、ラジーブ・ガンディー会議派政権⁽¹⁰⁾は従来の支持基盤

であるムスリムにも、そしてそのバランスをとるためにヒンドゥー勢力にも配慮する。その結果が1949年から封印されていたアヨーディヤーのバブリ・マスジッドをヒンドゥーの礼拝に開放するという1986年の決定であった。ヒンドゥー勢力は同マスジッドがラーム神の寺院を破壊してムガル朝の武将が建設したものと主張し、歴史の汚点を拭うためにその地にラーム神の寺院を建立する運動を展開していた。これに配慮したのである。自らの支持基盤を掘り崩すことになるアヨーディヤー問題の再浮上は会議派自身がそのきっかけを作った。もっとも、そのような動きを最大限利用したのが BJP などサング・パリヴァールであった。

1989年の連邦下院選挙では BJP は、会議派の不人気を背景に北インドを中心として議席を伸ばし改選前の2議席から86議席へ躍進した。BJP が躍進したのは他党との選挙調整もあるが、もうひとつはバブリ・マスジッドを焦点とする両宗派間の緊張が、ヒンドゥーの政党として BJP への支持を集めたためであった。UP 州では州立法議会選挙も同時に行われ、第1党にはジャナター・ダルがなり M・S・ヤーダヴ (Mulayam Singh Yadav) 政権が発足した。しかし、同党の内部分裂のために政権は崩壊し、1991年の選挙では BJP は過半数の221議席を得てカリヤン・シン (Kalyan Singh) 単独政権が成立した。

一方中央では1991年の選挙でナラシンハ・ラーオ (Narasimha Rao)¹¹⁾ 会議派政権が成立したが、同政権は話し合い¹²⁾、それが不可能な場合は司法の裁定によって、穏健な形で問題を処理しようとしていた。ラーオ首相は BJP 州政府は責任者としてバブリ・マスジッドの暴力的な破壊行為を容認しないであろうし、また、連邦制国家では中央政府による州政府への介入は制約されるとして (Rao [2006: 169, 255]), 強引な介入はひかえた (Parikh [1993])。

以上の政治状況から BJP や VHP, BD は大きな活動の自由を得た。たとえば1990年のアドヴァーニ (L. K. Advani) BJP 総裁による「ラト・ヤートラ」¹³⁾ と呼ばれるラーム寺院建立のための全国的示威運動や、「カール・セヴァー」(Kar Seva: 宗教的奉仕) と呼ばれるラーマ寺院建立に向けてたびたび行われた奉仕活動は宗派間の緊張と暴力をとまなうものであったが、大き

な制約を受けることなく、ヒンドゥー教徒を動員することができた。それが1992年12月6日の同マスジッドの破壊につながる¹⁴⁾。破壊は計画的であってUP州の警察は傍観しているだけであった。破壊の報はただちに伝わり北部や西部でムスリムの抗議行動とそれに対するヒンドゥーとの衝突による暴動が発生した¹⁵⁾。なかでも最大規模の死者を出したのはマハーラーシュトラ州のムンバイ¹⁶⁾であった。

第2節 マハーラーシュトラ州 1992-93年

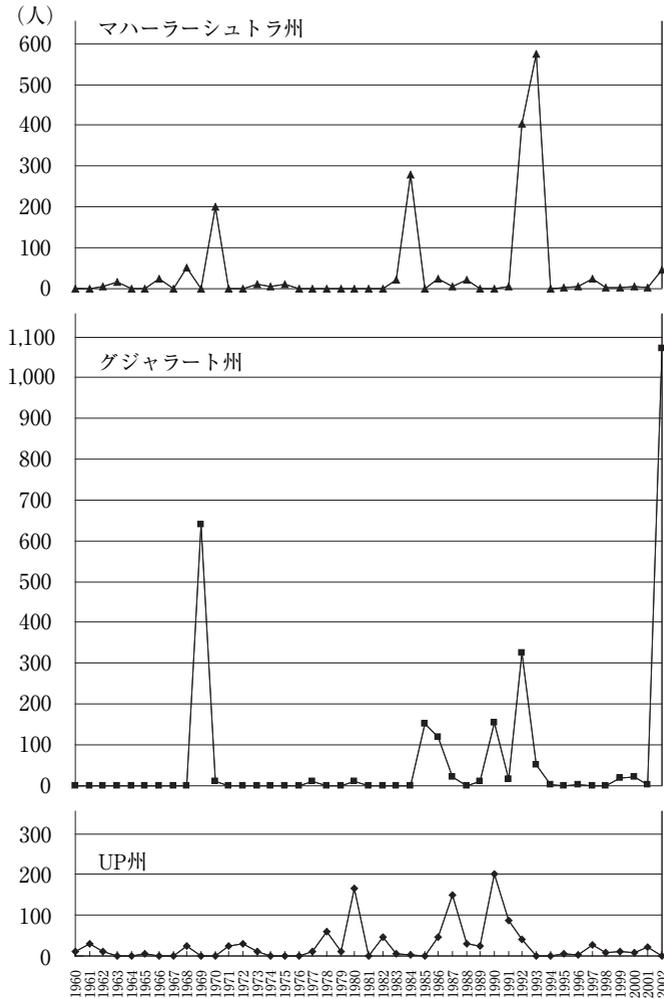
——コミユナル暴動とヒンドゥー・ナショナリズムの拡大——

図2のように、マハーラーシュトラ州では1992年から93年の暴動を除くと大規模なコミユナル暴動は1970年と1984年に起こっている。前者はムンバイに隣接するターナ(Thana)県のビワンディ(Bhiwandi)を中心とする暴動である。マハーラーシュトラ州の歴史的英雄であるシヴァージー生誕祭におけるヒンドゥーとムスリムの衝突が大規模な暴力に発展したものであるが、その背景にはアーメダバードで前年に起こったコミユナル暴動が両者間の緊張を高めていたという事情があった。1984年の暴動もビワンディからムンバイを中心とする暴動である。投石事件から両宗派間の対立が強まったところに、ムスリムを「よそもの」とする地方政党のSHSの扇動が事態を悪化させ大きな暴動となった。これらと比べると1992年末から翌年にかけての暴動はより大規模で組織化されたものであった。以下まず州政治の状況に触れた後、暴動の分析を行う。それによってコミユナル問題の政治社会構造が鮮明に浮かび上がる。

1. マハーラーシュトラ州の政治とシュリクリシュナ委員会報告

マハーラーシュトラ州は1960年の創設以来基本的に会議派が政権を担当し

図2 マハーラーシュトラ州、グジャラート州、UP州におけるヒンドゥー対ムスリムのコミューナル暴動の死者数



(出所) Engineer [2004: 228] より筆者作成。

(注) 暴動の犠牲者数は資料によって異なる場合があり、このグラフで示される数値と本文中の数値は差がある場合がある。

てきた。例外は1978年から80年にかけてのパワル（Sharad Pawar）の「進歩的民主戦線」¹⁷⁾、および、1995年から99年までのSHS・BJP連合政権である。アヨーディヤー事件当時は1991年の州立法議会選挙で勝利した会議派のナイク（S. Naik）州首相が政権を担当していたが暴動に有効な手を打てなかった。暴動後、州政府はその原因を調査する委員会を1993年に設立した。それがシュリクリシュナ委員会であるが、その委員会報告は以下のように州政治に巻き込まれスムーズには公表されなかった。

シュリクリシュナ（Srikrishna）ムンバイ高裁判事を委員長とする調査は会議派政権中には終わらなかった。そこで1995年の州立法議会選挙で勝利したSHS・BJP連合州政府は時間がかかりすぎるとして1996年にいったん委員会を解散した。これは後述するように暴動にSHS、とくに党総裁のB・タカレイ（Bal Thackeray）が深く関与していることが改めて明らかになったからである。しかし、中央で政権についたヴァジパイヤー（A. B. Vajpayee）BJP政権¹⁸⁾は解散が偏った決定であるとの批判を恐れ、州政府に委員会再開を助言した。その結果委員会は再開され、最終的に1998年に州政府に報告が提出されることになる¹⁹⁾。このようにいわくつきの委員会であったが、報告の内容は公正なものともみられている。以下は主として同委員会報告に依拠する説明である。

2. アヨーディヤー事件とコミュニアル暴動の展開

ムンバイを中心とする暴動は2波に分かれる。第1波は、1992年12月6日のバブリ・マスジッド破壊直後5日間の暴動で、第2波は翌年1月6日からの15日間である。第1波の暴動に至る背景としてはSHSやRSS/BJP勢力が1992年7月ごろからアヨーディヤー問題に関してさかんに扇情的運動を行い、そのため両宗派間の緊張が高まっていたという状況が重要である。そのような状況においてバブリ・マスジッド破壊の報道が伝わる。

マスジッド破壊の報道によりSHSなどを先頭としてヒンドゥーが「勝利」

を祝うため街頭にくりだした。しかしこれを警察は宗教的行進であるとして阻止しなかった。一方ムスリムの間では憤激と反発が高まり、街頭でのデモンストレーションなど抗議行動を起こした。多くの場合、それは平和な抗議として始まったが、次第にエスカレートして警察そしてヒンドゥー群衆との衝突となり、第1波の大規模な暴動となった。ただし暴動はヒンドゥー、ムスリム双方とも組織されたものではなく、その意味で「自然発生的」性格のものであった。

この第1波の暴動では警察は当初両コミュニティから攻撃されたが、暴動鎮圧のための発砲による死者はムスリムのほうがはるかに多かった。ただし、この第1波段階においては警察がムスリムを組織的に目標にしたとは考えられないという (Sr [1998: para 12])。

この第1波の暴動の後、両宗派の間の緊張をさらに高める展開が起こった。そのなかの重要なものとしてまず、12月26日から SHS と BJP によって始められた「マハー・アールティー」(Maha Aarti: 大いなる儀礼) が挙げられる。「アールティー」はもともと灯明の盆を回すヒンドゥー教の一般的儀礼であるが、それが SHS によって大規模に組織されたのが「マハー・アールティー」である。これはヒンドゥー教の儀礼を利用したヒンドゥー大衆動員の形態で、ムスリムの集団礼拝であるナマズ (Namaz) に対抗するものでもあった (Katzenstein et al. [1998: 228])。このマハー・アールティーは会場で行われる SHS や BJP のムスリムに対する一方的な演説とともに、コミユナルな感情を扇動する役割を果たし、実際、ムスリムに対する暴力行為に発展することもあった。これは翌年2月まで各地で行われた。第1波の大規模な暴動があったにもかかわらず、警察がマハー・アールティーを規制しなかったのは警察、とくに現場の警官には SHS の影響が強いこと、また、規制することがかえって SHS などを刺激しコミユナル暴動につながることを恐れたのではないかといわれる²⁰。州首相ナイクも少なくとも表面的には宗教儀式であるとして介入には積極的ではなかったという (Sr [1998: 218])。

ムスリムの側でも第1波後にはナマズに出席する人数が大幅に増えたと

いわれ (Sr [1998: 12]), それは翻って、ムスリムが「復讐」を煽っているという疑念をヒンドゥー側に引き起こしたとされる。マハー・アールティーはこれに対抗する意味をもつことになる。

また対立の雰囲気を助長するにあたっては現地マラーティー語新聞の『サームナ』(Saamna) や『ナヴァーカル』(Navaakal) が扇情的な報道を行い、宗派間の相互不信と緊張を高めた。とりわけ SHS 総裁タカレイはムスリムを攻撃する扇動的な言動を発し状況を悪化させた。そのような状況で暴力事件の増加が第2波の暴動につながる。

第2波は1993年1月6日から始まった。同日から殺傷事件などが増加し、ムスリムが攻撃してくるという噂が地方新聞などに扇動されて広がったという。そしてヒンドゥー勢力による「反発」が本格的な暴動に転化するのには8日からで、SHS が暴動の先頭に立ってムスリムに「報復」した。その意味でヒンドゥーの側からの襲撃はかなり組織化されたものであったといえよう。ムスリムの側ではこの時点でも有効な指導者はなくヒンドゥーからの攻撃に対処できなかった。しかも警察にはヒンドゥーよりの行動がみられ、発砲により多くのムスリムが死亡している。その後、軍隊の動員などにより1月20日には暴動は沈静化する。

第1、2波の暴動中、会議派のもとにあったムンバイの市政は混乱で機能停止し、警察は全体としてムスリムへの暴力を阻止しようとしなかったといわれる。第1波と第2波の期間を通じて暴動の死者数は900名に及んだ。そのうち宗派別ではムスリム575名、ヒンドゥー275名、その他5名、不明45名となっている。原因別にみると警察の発砲356名、刃物による殺傷347名、放火91名、暴徒による殺人80名、発砲事件によるもの22名、その他4名となっている (Sr [1998: 18])⁽²⁾。

以上が暴動そのものの推移であるが、報告書は暴動が大規模化した構造的要因として経済の停滞を挙げている。組織部門で雇用が乏しいこと、インフォーマル・セクターの増大とスラムの拡大による住民の不満、人口の増加とムスリムのゲッター化傾向などである。政治的状况としてはヒンドゥー・ナ

シヨナリストの運動の激化によるムスリムの社会的疎外感の高まりも指摘している。確かに社会的経済的背景、そして長年にわたる SHS や BJP などの運動によるムスリムの疎外感は重要な要因である。しかしそれと同様に重要な要因は州政府の問題である。州政府が暴動期間中でさえマハー・アールティーを多くの場合禁止しなかったこと、上級の警官が巡査など下級レベルの警官を統制できず後者が SHS などの影響を受けてムスリムに偏見を抱く傾向が強かったこと、暴動後今日に至るまで会議派州政権や司法も SHS を罰することができないこと²²⁾、要するに州政府にコミユナル暴動を起こさせないという明確な意志が欠如していたことが最大の原因と考えられる。

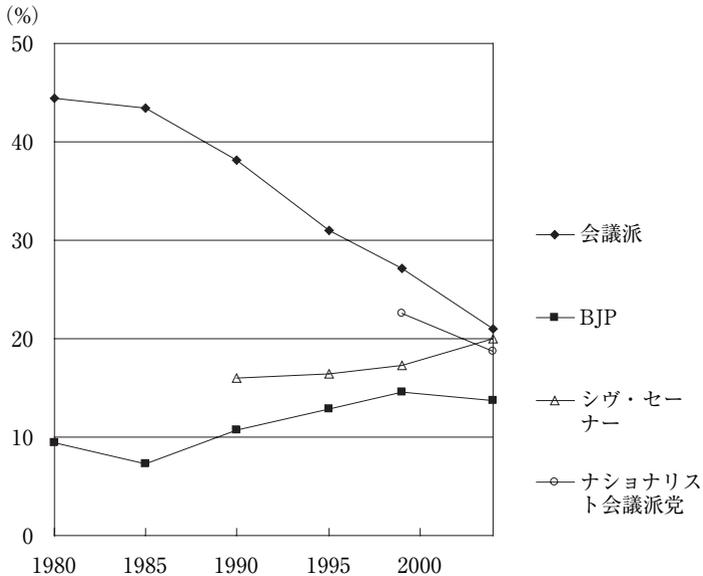
3. コミュナル暴動後の州政治の展開

ナイク州首相は、コミユナル暴動に有効な手を打てなかったことで多くの批判をあび、2月下旬には会議派中央政府の国防大臣パウルに州首相の座をゆずることになる。パウルは前述したようにマハーラーシュトラ州首相を務め同州に大きな影響力をもつ政治家である²³⁾。

本節の最後に暴動が主要政党に対する人々の評価をどう変えたか選挙データから検討してみたい。図3は州立法議会選挙の結果である。得票率の推移からわかるように、会議派の支持基盤は徐々に縮小していたが1990年の選挙²⁴⁾までは政権を維持できた。しかし、1995年の選挙では定員288議席中、会議派は80、SHSは73、BJPは65という結果となりSHS・BJP連合が勝利した。ここでコミユナル暴動が人々の政党選好に与えた影響をみるため1990年から1995年の州立法議会選挙の変化を検討してみたい。

州全体では2回の選挙の間で得票率変化は会議派が-7.3%、SHS・BJP連合が+2.5%であった。会議派が7.3%支持を失ったのは、まず、コミユナル暴動の拡大を阻止できなかった責任を選挙民、とくにムスリムに問われたことがある。宗派別のサーベイは得ることが難しいが、パルシカル²⁵⁾の調査(Palshikar [1996: 176])ではムスリムの約70%がムスリムの利益を保護して

図3 マハーラーシュトラ州立法議会選挙における得票率



(出所) Election Commission of India のホームページ <http://eci.nic.in/StatisticalReports/Election-Statistics.asp> (2008年12月30日アクセス) のマハーラーシュトラ州立法議会選挙の統計データより筆者作成。

表1 1995年マハーラーシュトラ州立法議会選挙におけるカースト別の政党選好

カースト	政党 (%)			
	会議派	会議派脱党者	BJP	シヴ・セナー (=SHS)
高カースト	13.6	2.3	56.8	6.8
中間カースト	34.4	6.6	36.1	3.3
マラーター・クンビー	39.8	13.7	8.2	17.6
OBC	33.3	11.7	19.0	11.3
SC	31.4	5.1	7.1	5.8
ST	75.0	3.9	10.5	1.3
非マハーラーシュトラ人	30.0	3.3	35.0	13.3

(出所) Palshikar [1996: 176]。

(注) (1) サーベイは州立法議会選挙が終了した2週間あとの1995年2月に行われた。サンプル数は1055。

(2) 他の政党があるため各カーストの合計は100%には達しない。

くれる政党はないと答え、多くのムスリムは伝統的に支持してきた会議派にも1995年の選挙では投票しなかったと推定される。また、カースト別の政党支持構造を表1でみると、「中間カースト」や「マラーター・クンビー」、および、「OBC」といった人口の大きな部分を占める中間層のかなりの部分が1995年の選挙ではSHS・BJP連合を支持したことがわかる。これが同連合の躍進に貢献したと考えられる。一方、会議派内部の要因としては、政権の腐敗、州会議派からの有力政治家の造反などが指摘されるが、とくに後者の要因が大きいといわれる（Vora [1996: 172]）。

次に暴動の中心であったムンバイについて考察してみたい。ムンバイでは得票率の変化は会議派が-6.3%、SHS・BJP連合+6.9%となっている²⁵。ムンバイと州全体との変化率の差は会議派が+1.0%、SHS・BJP連合は+4.4%となる。したがってほかの地域と比べるとコミューナル暴動の影響は、SHS・BJP連合への支持をより広げたという形で発現したと考えられる。その際ムスリムは暴動によって、よりSHS・BJP連合を支持するようになったとは考えられないので、同連合への支持を拡大したのはヒンドゥーであったと考えられる。

以上のように1992年12月から翌年1月にかけてのコミューナル暴動とその後の展開が示すポイントは以下のとおりである。会議派州政権にコミューナル暴動を阻止しようとする政治的意志が弱かったこと、SHSの現場レベルの警察への影響力があり上級の警察もそれを排除できなかったこと、そのような状況下で最初自然発生的な暴力が、メディアの誇張やマハー・アールティーなどの過程を通じてヒンドゥーの側では次第にSHSによる組織化された暴力へと移行し、その結果ムスリム側に多大の人的損害を与えたこと、以上のような宗派間暴力によって与党会議派は威信を失墜し、またヒンドゥーはSHS・BJP連合をより支持するようになったことである。

1995年の選挙の結果生まれたSHS・BJP連合は前述したようにシュリクリシュナ委員会をいったんは解散させようとした。また報告書が提出された後に州政府は「政府がとるべき行動に関するメモランダム」を出しているが、

それは責任回避に終始するものであった（ATR [1998]）。この連合政権はムスリムなど少数派の利害関係には冷淡で、たとえば1992年2月に設置された「マハーラーシュトラ州少数派委員会」（Maharashtra State Minorities Commission）は少数派の状況の改善のための勧告を行う機関であるが、1995年3月に3年間の設置終了期が来たとき新政府はその任期を延長せず解散を決めた。同委員会が再び設置されたのは会議派州政権となった2000年2月である（Maharashtra State Minorities Commission [n.d.: 8]）。

以上のようにコミユナル暴動は州政治をヒンドゥー多数派に、より迎合的なものに変化させたといつてよい。1999年の州立法議会選挙で会議派・ナショナリスト会議派連合は返り咲いたが、図3にみるとおりSHS・BJP連合の得票率は減少していない。この州は都市部を中心に近代化が進み、市民NGOなどによる反コミユナリズム運動も盛んである。また、都市の基底レベルでは住民委員会²⁹などが組織され、宥和活動を行ったり、事件の火種を早期に摘み取る活動を行ったりしている。しかし、全体的にみるとヒンドゥー多数派のヒンドゥー・ナショナリズムへの傾斜傾向は、社会的にはむしろ定着したものともみることができる。このようなコミユナル暴動の影響はグジャラート州でより極端な形でみることができる。

第3節 グジャラート州 2002年

——コミユナル「暴動」とヒンドゥー多数派の専制——

2002年にグジャラート州で起きたヒンドゥーとムスリムの間のコミユナル暴動は独立後インドで最悪のものであった。同州ではこれ以外では図2のように1969年、1985～86年、1990年、1992年に大きなコミユナル暴動が起きている。1969年の暴動はアーメダバードのジャガンナート寺院近くでの小競り合いが発端となり、それが大規模化したものである（Government of Gujarat [1971]）。また1985年のアーメダバードを中心とする暴動は、政府のOBCへ

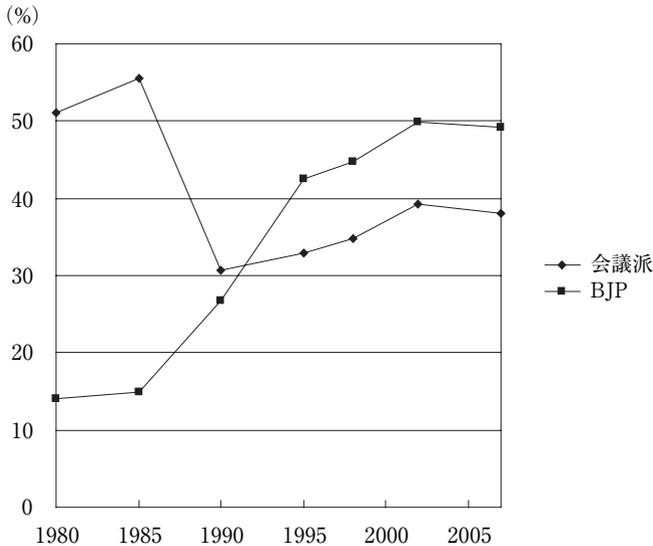
の留保枠の拡大に反対する暴力がコミユナル暴動に転化したものである(Shani [2007: 80-88])。これらのコミユナル暴動は発端は異なり、また大衆連盟／BJP や RSS の扇動があったにせよ、後年のものと比べるとより「自然発生的」であることが特徴である。

しかし、1990年と1992年の暴動はアヨーディヤー運動が原因であり、その意味でサング・パリヴァールにとって計画の範囲内のものであった。1990年の暴動はアドヴァーニ率いる前述のラト・ヤートラ、1992年はバプリー・マズジッドの破壊が原因となっている。グジャラート州がこの運動にきわめて敏感なのは、同州から多数のヒンドゥーがラーム寺院建立のための一連のカール・セーヴァーに参加していたこと(CCTG I [2002: 14])から推察できる。そして2002年の暴動は1990年以降の流れが極端な形で現れるものとなった。その原因のひとつはBJPが州政権についていたことである。以下ではBJP政権成立の経緯を説明したのちに、同政権のもとで起こった「暴動」の分析に入る²⁷⁾。

1. 会議派の退潮と BJP の伸張

グジャラート州は1980年代までは、1975～76年および1977～80年のジャナター党政権を除き、会議派が政権を握っていた。会議派の支持基盤は1970年代中頃以降はクシャトリア、SC、ST、ムスリムなど、いわゆる KHAM (Kshatriyas, Harijans [= SC], Adivasis [= ST], Muslims の頭文字の組み合わせ)といわれる幅広い連合からなっていたといわれる。しかしこのような動員戦略はパティダールなど実力をもつ上位カーストから中、下位のコミュニティに支持基盤を移すもので、上位カーストの不満を高めた。加えて政権の腐敗、1985年の暴動などによって人々の支持を失っていく。その結果、図4のように州立法議会選挙では会議派への支持は1990年には大きく減少し、党内の権力闘争を激化させ、造反したC・パテル(Chimanbhai Patel)の政権(1990～94年)が成立する。

図4 グジャラート州立法議会選挙における得票率



(出所) Election Commission of India のホームページ <http://eci.nic.in/StatisticalReports/Election-Statistics.asp> (2008年12月30日アクセス) のグジャラート州立法議会選挙の統計データより筆者作成。

会議派の後退と反比例して勢力を伸ばしたのが BJP で、1995年の選挙で初めて州政権を獲得する。しかし、急速に勢力を伸ばしたがゆえに内部にさまざまな要素を抱えて内紛が絶えず翌年には分裂し、分裂した S・ワゲーラ (Shankersinh Vaghela) 派が政権につく。しかしこの政権も安定せず1998年には解散総選挙で BJP が再び勝利し、K・パテール (Keshubhai Patel) BJP 政権が成立する。以上のような政党間、すなわち、会議派對 BJP、および、政党内派閥間の政治的競争の激しさは、多数派ヒンドゥーの支持をめぐる競争を激化させることになる。それが州政治のコミュナル化の背景にある。

このころから州政治の「ヒンドゥー化」が顕著となる。たとえば州政府は2000年には RSS の州政府職員への採用を解禁したり、ムスリム警官を重要なポストからはずしたりした (CCTG II [2002: 89])。また、ヒンドゥーとムスリムの対立を扇動する大量のパンフレットが撒かれたりした。もっとも

RSSの州政府職員への解禁は強い批判を呼び、その後撤回されている。その後、同政権は2001年のパンチャーヤト選挙で不人気が目立った。そこでBJP党中央が建て直しのために送り込んだのが、RSSメンバーでヒンドゥー・ナショナリズムの強硬派であるナレンドラ・モディ (Narendra Modi) 新首相であった。そのもとでコミユナル「暴動」が発生する。

2. ゴードラ事件と「暴動」の特徴

「暴動」の発端は2002年2月27日にアーメダバードから東約110キロメートルの位置にあるゴードラ (Godhra) で起きた列車火災で、アヨーディヤールのカール・セヴァーから帰郷途中のVHP団員などヒンドゥー教徒58名が死亡したことである。この報が伝わるや翌日から数日中に24県のうち16県で暴動が起き、ムスリムがおもな標的とされた (CCTG I [2002: 18-22])。「暴動」はその後3月中頃から再燃し、断続的に6月ごろまで続く。

この事件の理解は政治的立場の違いによって大きく分かれる。そもそも列車火災が「事故」であるのか一部のムスリムの「計画的犯行」であるのか政府でも意見が分かれる。中央では2004年に政権についた会議派率いる統一進歩連合 (United Progressive Alliance: UPA) 政権の鉄道省が任命したバネルジー (U. C. Banerjee) を委員長とする委員会は、2006年に提出された報告書のなかで火災は事故であるとした²⁸⁾。これに対してBJP州政府が設立したナナヴァティ (G. T. Nanavati) を長とする委員会が2008年9月に州政府に提出した報告の第I部 (Nanavati and Mehta [2008]) では火災が仕組まれたものであったとしている²⁹⁾。このように事件は今なおきわめてセンシティブでどのような資料にもとづくかによって理解に大きな差が生まれかねない。ここでは著名なジャーナリスト、元最高裁判事、人権団体などから組織され、信頼性が高いと思われる「グジャラートの殺戮を調査する市民法廷」³⁰⁾の報告書にも依拠して説明したい。

2月27日の列車火災直後、VHPなどが抗議のバンド (“bandh” = 「ゼネラ

ル・ストライキ)を行うことを発表した。一方、モディ首相も現地を訪問し、列車火災は「事前に計画されたテロ」であるとして異例の州のバンドを実施することを決めた。またグジャラート語地方紙の『サンデーシュ』(Sandesh)や『グジャラート・サマーチャール』(Gujarat Samachar)などが事件をセンセーショナルに報道し対立を煽った(Indian Social Institute [2002: 108])。そのような関係悪化のなか、サング・パリヴァールは列車火災をムスリムのテロと決めつけムスリムへの攻撃を準備したという(CCTG II [2002: 18])。報告書によると「暴動」の特徴は以下のとおりである。

まず基本的特徴は「暴動」とは通称されるものの、多くの場合VHP/BD/BJPなどに扇動されたヒンドゥーによるムスリムへの「襲撃」であったことである。2001年人口センサスによるとムスリムの人口比は都市部で14.2%、農村部で6.0%、全体で9.1%である。したがって圧倒的多数のヒンドゥーがムスリムと対峙することになり、そのため「一方的」な結果になる可能性が高いが³¹⁾、その傾向を助長したのは、暴力がサング・パリヴァール側で意図的、組織的に行使されたからである。アーメダバードなどでは襲撃は数千人ものヒンドゥーからなる大規模なものがみられ、しかも多くの場合、正確にムスリムの住居や商店をねらったのものであった。たとえばヒンドゥーとムスリムが混在している地域もムスリムの住居や商店だけが正確に襲われている。そのような正確な襲撃に必要なムスリムの住居地のリストはVHPなどによって作成されたという(CCTG I [2002: 84, 209, 222, 260])。

アーメダバード周辺で事態はもっとも深刻であったが、今回の特徴はコミュニティ間関係が何世代にもわたり比較的平穏であった農村部でも広範に襲撃が行われたことである(Communalism Combat [2002: 100])。襲撃はBJP、VHPやBDなどの扇動や指導抜きには考えることは難しい。また村長(sarpanch)などヒンドゥーの地域有力者がその先頭に立つ場合が相当数みられた(CCTG I [2002: 67, 83, 96])。襲撃の先頭に立ったものはパテールなど村内の有力なヒンドゥー・カーストが多いが、SCやSTの村長などの例もある。SCやSTがムスリムを襲撃する例は比較的近年のことで、STについては

1987年に初めてみられるという (CCTG I [2002: 84, 209, 211])。そこには VHP や RSS などがヒンドゥー社会の周縁コミュニティをヒンドゥー社会に取り込んできた運動の影響がみられる。

しかし、深刻な問題に発展した最大の原因は警察など州の治安機構が有効な手だてを講じなかったことである。襲撃中ムスリムは警察に助けをもとめたが、多くの地域で警察はまったく動かなかった (CCTG I [2002: 247])。さらに、警察がヒンドゥーの暴徒の側に加担した場合もある。このような警察の態度は州政府指導部の指示によるものと報告書は断定している。また軍の展開が2日遅れの3月1日からと遅れたため犠牲者の数を増やすこととなった。このような事態に対して州政府指導部や BJP/VHP 指導者は「暴動」をゴードラ事件に対するヒンドゥーの「自発的な反発」であるとしムスリムへの攻撃を暗に正当化した (CCTG II [2002: 19, 37, 60, 76])。また中央政府も BJP 率いる国民民主連合 (National Democratic Alliance: NDA) 政権であったため結局のところモディ政権を免罪した³²⁾。

以上のようにサング・パリヴァールの組織的扇動と州政府・警察の、少なくとも「暴動」開始後数日間の意図的不作為またはヒンドゥーへの肩入れ、という要因から「暴動」はアーメダバードだけでなく広範な農村地域にも広がり、かつ、ムスリムに一方的な犠牲を強いるものとなった。「暴動」の犠牲者は政府発表によるとムスリムが790名、ヒンドゥーが254名でありムスリムが76%を占めた³³⁾。

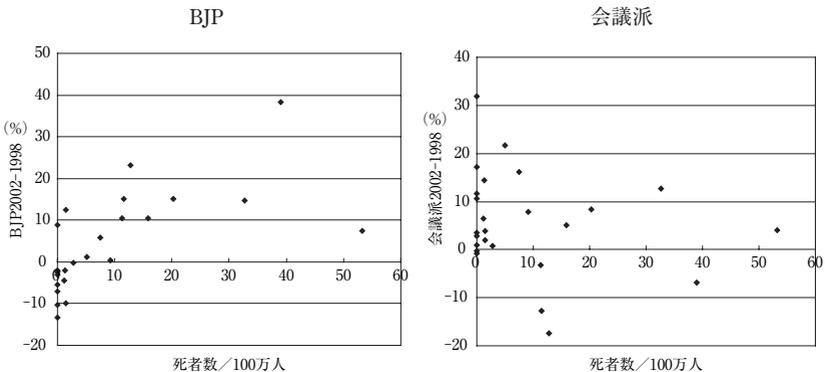
3. 暴動後の州立法議会選挙と州政治

「暴動」の影響は大きく社会的亀裂はさらに深刻化した³⁴⁾。そしてそのような亀裂を悪化させたのは BJP 州政府の姿勢である。暴動後の救済措置にしても一部の NGO を除き、ムスリムの団体のみが避難民の救助キャンプを運営するなど (CCTG II [2002: 122])、モディ州政府はきわめて冷淡な態度をとり続けている。BJP 政権がこのような社会的亀裂の深化を放置するひとつ

の理由は、それが多数派ヒンドゥーの票を BJP にまとめ、州立法議会選挙で優位に立つことが期待できるからである。実際、州 BJP 指導部は暴動後「BJP の“ネーション・ビルディング”への貢献の記憶が人々の心から消えないうちに」州立法議会選挙を早期に行う必要が感じられていたという (Indian Social Institute [2002: 3])。この場合の「ネーション・ビルディング」とはヒンドゥーを BJP にまとめ、ヒンドゥーの「ネーション」に従わないものを排除することを意味する。そのような状況下で2002年12月の州立法議会選挙が行われた。

図5の2つのグラフは県別の1998年から2002年の州立法議会選挙における BJP および会議派の得票率の変化とコミューナル暴動の関係をみたものである。グラフから明らかなように暴動が深刻であった地域ほど BJP の得票率が伸びる傾向が顕著である。グラフのデータをムスリム人口比率も組み込んだうえで回帰分析を行ったのが表2であるが³⁵⁾、暴動が BJP 得票率を伸ばす効果は明らかである。反対に会議派の得票率には大きな影響はみられない。ただし、暴動の犠牲者がほとんどない県では総じて会議派の得票率は上昇しており、暴動がなければ会議派優位に選挙が進む可能性があったことが示唆され

図5 1998年から2002年の州立法議会選挙における BJP および会議派の得票率の変化とコミューナル暴動



(出所) 筆者作成。

表2 1998年から2002年の州立法議会選挙における BJP 得票率の変化と
コミューナル暴動

従属変数：「BJP2002-1998」

変数	係数	t 値	有意確率	VIF
ムスリムの人口比 (%)	-0.230	-0.36	0.724	1.03
人口100万人あたり暴動死傷者 (定数)	0.428	2.41	0.031	1.03
	4.582	0.65	0.526	-

OLS による推定。R²=0.330, 自由度調整済み R²=0.227, サンプル数 = 16 (死者数/100万人 > 0 の場合のみ)

White の分散不均一性テスト：chi2(5) = 9.86, Prob > chi2=0.0794

(出所) 次の資料から筆者算出。

県 (district) 別人口よびムスリム人口比：Census of India 2001, 県の境界に合わせた州立法議会選挙データ：Lobo [2006: 210], コミュナル暴動死者数：Communalism Combat [2002: 100]。

(注) 5%水準で分散不均一性の問題はない。VIF (=「分散拡大要因」)の値からみて説明変数間の多重共線性は考慮する必要はない。

表3 サンプル調査にもとづくカーストやコミュニティの政党選好 (%)

	BJP					
	1995*	1996	1998*	1999	2002*	2004
カースト/コミュニティ						
高カースト	67	76	77	77	79	67
OBC	38	65	57	38	59	40
SC	17	61	47	33	27	24
ST	29	34	43	33	34	48
ムスリム	7	33	38	10	10	20
	会議派					
高カースト	20	18	13	16	16	26
OBC	38	30	28	61	38	55
SC	61	35	45	64	67	67
ST	59	55	46	67	49	46
ムスリム	47	68	62	90	69	60

(出所) Shah [2007: 173]。

(注) 応答者数：1996：N=484, 1998：N=340, 1999：N=381, 2002：N=1853, 2004：N=914。

*州立法議会選挙を表す。その他は連邦下院選挙。

る。

それではコミュニティ別の政党支持構造に暴動はどのような影響を及ぼしたのであろうか。コミュニティ別の政党支持の変化はサンプル調査として表3のようなものがある。それによると1998年から2002年の州立法議会選挙にかけて BJP は高カーストと OBC においては支持率を維持したが、SC, ST, そして、とくにムスリムの支持を大きく失っている。ただし支持を維持した集団のうち、高カーストは1990年代中頃から2000年代前半まで高く安定した支持率を示しているが、OBC はそうではない。OBC は多くのカーストやコミュニティをまとめたカテゴリーで人口的には最大のカテゴリーである。その OBC の BJP への支持率は1998年から翌1999年にかけて急減したが、次の2002年の選挙では急増し、結果的に1998年までのレベルに回復している。このことから暴動によって BJP への支持を急増させた集団の中心は OBC であったことが推察される。一方、会議派に関して重要な点はムスリムの支持率が急減したことである。暴動ではムスリムの犠牲者が圧倒的に多かったが、それはムスリムが会議派も含め既成政党一般に失望する状況を作りだした。

以上のような状況は州政治でどのような影響を及ぼしているであろうか。暴動後の人々の意識に関して以下の興味深い調査がある。2004年3月に州全体を対象とする意識調査では、「多数派であるヒンドゥーが統治すべき」(n = 2961) との設問に、「強く同意」および「同意」が計64%、「強く反対」および「反対」が計32%となった。また「RSS は愛国主義を推進しているから政府はその活動を援助すべきである」との設問についてはそれぞれ57%、31%であった (Ganguly et al. [2006: 65, 68])。つまりヒンドゥー・ナショナリズムが「多数派」によって正当化されたのである。これはグジャラート州における長年のヒンドゥー・ナショナリズムの展開、そしてコミューナル暴動の影響によるものと考えられる。そして政党政治の言説でそのもっとも顕著な影響は「ムスリム問題」が背後に押し込められてしまったことである。

従来ムスリムを支持基盤としていた会議派でさえ、ムスリムの「問題」を強く前面に出せなくなってしまった。なぜなら、社会的亀裂が深刻な状況で

はそれは多数派ヒンドゥーの反発を引き起こし選挙で不利になるからである。2007年の州立法議会選挙では「開発」がもっとも重要な争点となったといわれるが、それは野党である会議派がヒンドゥー多数派の反発を恐れてムスリムが切実に求める争点を前面に押し出せなかったからである。会議派の選挙綱領は確かに、ムスリムなど少数派に対する政策として福祉や2002年の事件に対する迅速な判決、そしてコミユナル暴動を煽る勢力の抑止なども一応は掲げているが、綱領の大部分は「開発」問題に割かれている (Gujarat Pradesh Congress [2007])。一方、BJPの選挙綱領は過去5年の経済開発の成果とBJP政権の統治能力の高さを強調することが中心で、2002年の暴動、ムスリムなど少数派の福祉などには一切言及はなく、またヒンドゥー・ナショナリズムに対する言及もなく、「開発」(development)を中心に据えた主張となっている (Bhartiya Janta Party [Gujarat Pradesh] [2007])。言説のレベルではヒンドゥー多数派の専制という状況が成立してしまっているのである。

グジャラート州のケースは特異かもしれない。その点を確認するために州比較の最後としてアヨーディヤー問題の震源地であったUP州の現状を簡単に検討してみたい。

第4節 UP州——ヒンドゥー・ナショナリズムの「抑制」——

UP州は従来、コミユナリズムの重要な震源地とされ、事実、メーラト (Meerut) からモラーダーバード (Moradabad) の西部地域や、アリーガル (Aligarh)、カンプル (Kanpur) など、たびたびコミユナル暴動を起こしてきた都市を抱える。1990年以前では図2でわかるように3回の大きな暴動が発生している。1980年にモラーダーバード、1987年にはメーラトで大暴動が起こっている。前者は偶発的イベントが発展したものである。後者も発端は偶発的イベントであったが、大暴動に発展したのはアヨーディヤー運動の影響が大きい (Engineer [2004: 51, 86])。これらはいずれも会議派州政権下で起こり、

州武装警察隊 (Provincial Armed Constabulary) がムスリムを抑圧したことがムスリムに大きな犠牲者を出す原因となった。メーラトの場合は SC がムスリム襲撃に加わったのも大きな特徴である (Engineer [1988: 26-30])。1990年の場合はビジノール (Bijnor) で大きな暴動が起こっているが、これもアヨーディヤー運動の影響である。

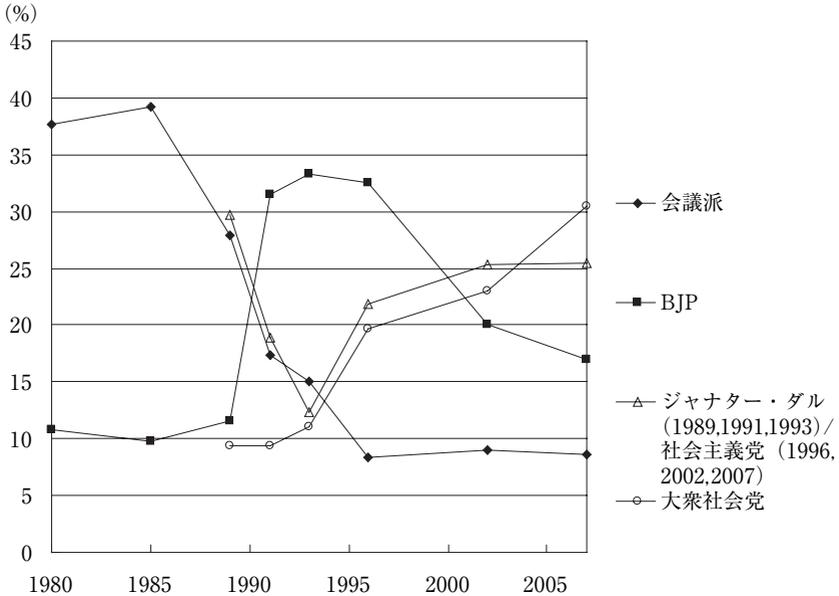
これらの暴動は確かに大規模である。しかし前述のムンバイやグジャラート州の暴動に比べれば相対的には小さい。バブリ・マスジッドが破壊された1992年末から翌年にかけての時期の暴力はさらに低レベルで、1993年以降は大規模な暴動は起こっていない。したがってここでの分析は、ヒンドゥーとムスリムが対立する歴史的、潜在的要素は前述の2つの州と比べても少なくないにもかかわらず、なぜ近年 UP 州では大規模な暴動が起こっていないのかという問いに対する分析が主になる。考えられるもっとも重要な要因は州政府のあり方である。

1992年12月のバブリ・マスジッドの破壊後 UP 州は中央政府による直接統治、すなわち、大統領統治⁹⁶のもとにおかれた。大統領統治後、暴動の広がり回避されたのは中央政府による治安部門も含む州行政の掌握が最大の要因であった。これから推察されるように暴動を押さえこむ政府の意志が決定的に重要なのである (Brass [2003])。以下、大統領統治が解除された1993年以降の州政治の推移をみてみよう。

1. 主要政党とコミュニティの「系列化」

UP 州では1980年代以降、社会経済開発の失敗、OBC の台頭、そして OBC の台頭と対をなすところのヒンドゥー・ナショナリズムの高まりなどから会議派は支持を大きく失った (Hasan [1998])。会議派のように多くのコミュニティから支持を得る政党が存在しなくなった結果、UP 州では1993年以降、2007年の選挙まで単独で議会過半数を制する政党は現れなかった。その政治的空隙をついたのが、まず、OBC を主要な支持基盤とするジャナ

図6 UP州立法議会選挙における得票率



(出所) Election Commission of India のホームページ <http://eci.nic.in/StatisticalReports/Election-Statistics.asp> (2008年12月30日アクセス), UP州立法議会選挙の統計データより筆者作成。

ター・ダルで、その崩壊後は BJP であった。BJP は1990年代初めにはヒンドゥー・ナショナリズムの昂揚によって高カーストのみならずほかのカーストにも一定の支持を広げた。しかしそれは長くは続かず、図6のように1990年代後半以降は退潮傾向がはっきりし、替わって台頭したのが社会主義党 (Samajwadi Party) と大衆社会党 (Bahujan Samaj Party) であった。会議派、そしてムスリムを除くという意味でより限定的ではあるが、BJP による多くのコミュニティの包括的支持を得ようとする試みが結局失敗するのは、ヒンドゥー内のコミュニティ間の社会的亀裂が深まり、各コミュニティが独自の政治的代表をもとうとする傾向が徐々に強まったからである。その結果、政党とその政党が代表しようとするコミュニティとのつながりが強化される「系列化」現象が顕著になる (近藤則夫 [1998])。それは表4に明らかである。

表4 1996年のUP州における連邦下院議員選挙の社会階層別政党支持率 (%)

	会議派	BJP	大衆社会党	統一戦線 (主力は社会主義党)
高カースト	6.5	87.3	0.9	11.9
ヤーダヴ	8.6	7.2	4.3	72.7
ヤーダヴ以外の OBC	6.9	41.7	16.8	20.4
SC	8.2	8.6	63.4	11.3
ムスリム	6.4	1.2	4.7	72.7

(出所) Chandra and Parmar [1997]。

(注) Centre for the Study of Developing Society によって1996年6月11-30日に行われた調査。サンプル数1430。

「統一戦線」は「国民戦線」と「左翼戦線」のほかに会議派(テワリー)などを含むが、UP州での最大勢力は社会主義党である。統一戦線の当選者数は、社会主義党が110名に対してその他が25名であった。

BJP は高カースト、社会主義党はヤーダヴとムスリム、そして大衆社会党はSC と安定的に結びつく状況が1990年代後半以降できた。このような政党とコミュニティの結びつきは比較的安定的である。なぜなら政党は各コミュニティの利益を代表することによってその支持を得ているから、ほかのコミュニティの利益を代表する政党とは容易に妥協できないし、また、各コミュニティにとっては政局が分裂しており、ほかの政党が政権につく可能性を見通せない以上、そして当該政党が自らの利害を代表してくれるとわかっている以上、戦略的な投票行動をとるよりも、自らのコミュニティを代表する政党を支持するほうが理にかなうからである。

この「系列化」現象によって選挙では分裂が固定化される傾向が強くなり、そのため単独過半数を制する政党が現れることが難しくなった。したがって政党の合従連衡による連合政権が常態となり、それがうまくいかなくなる場合は大統領統治の適用(1995~1997年, 2002年)となり、不安定な政権が続いた。たとえば1993年以降2007年までの州首相の平均任期は約1.2年となっている。2007年の選挙では大衆社会党が約3割の得票率をあげ単独過半数を制したが「系列化」の構造は大きく変わったとは考えにくい。このような

かでムスリムなど少数派の問題が政治的にどのように位置づけられたのかが重要である。以下、それを主要政党の代表的言説である選挙綱領をもとに検討する。

2. 「系列化」状況における主要政党の「ムスリム」問題

結論的にいうと主要政党の選挙政治における言説では、BJPを除いては、ムスリムに対するアピールが顕著なことが大きな特徴である。BJPはそのヒンドゥー・ナショナリズムゆえにムスリムからの支持を実際上ほとんど当てにしてない。しかしそれ以外の主要政党は以下のようにムスリムの支持を求め競合している姿がはっきりとしている。

まず社会主義党に関してはその支持基盤がヤーダヴ・カーストとムスリムで、どちらの支持が欠けても選挙で勝つことは難しい。そのうちヤーダヴは安定的支持基盤であるが、ムスリムは自分のコミュニティの利益や安全を保障してくれる政党に戦略的に投票する傾向が顕著でその支持は流動的である。したがってムスリムに対する働きかけが重点的にならざるをえない。2007年の州立法議会選挙の選挙綱領でもそれは明確に表れており、社会主義党がUP州政権についた時期にはコミュニカルな勢力を押さえこみコミュニカル暴動を起こさせなかったこと、留保制度を含めさまざまな援助を行う用意があることなどが述べられ、ムスリムへ懸命とってよいほどのアピールが行われている (Samajwadi Party [2007: 1, 5, 9, 10])。それは2004年の連邦下院選挙の綱領 (Samajwadi Party [2004]) よりも明白である。

一方、大衆社会党の基本的な支持基盤は表4のように従来からSCであったが、1990年代後半以降、支持基盤を広げるためにほかのコミュニティにも働きかけを活発にしていった。ムスリムにも積極的にアピールを行っており、たとえば1990年代末に出されたムスリムへのアピールでは高カーストがコミュニカル暴動などを引き起こしSCとムスリムを敵対させていること、1997年にBJPと連合を組み州政権についたが、それはムスリムに敵対的な政策を

させないためであったこと、大衆社会党政権のもとでこそムスリムは安心してくらせることなどを主張している (Bahujan Samaj Party [n.d. a])。しかし大衆社会党が議会で安定過半数を得るためには SC やムスリムだけでなくほかのカーストの一定の支持も必要とする。そのため大衆社会党は2000年代にはいると次第に上位カーストの不安を取り除くような姿勢をもみせるようになる。たとえば2006年頃に出されたアピールでは大衆社会党はマヌ法典の説くような不平等な社会には反対であるが、「サヴァルナ」(上位の3種姓、すなわち「ブラーマン」、「クシャトリア」、「ヴァニア」に属するカースト)の人々も差別の思想に影響されなければ敵対しないこと、現に選挙では上位カーストの人々を候補者に立てたことなどをアピールしている (Bahujan Samaj Party [n.d. b])。このようなムスリムにも上位のカーストにも一定の支持を広げる戦略が成功を納めたのが、2007年州立法議会選挙である。同選挙では単独過半数を制し州政権を樹立した。

最後に、会議派もムスリムの支持獲得に力をおいていることは明らかである。もともと UP 州のムスリムは1980年代までは会議派支持者が多かった。その支持は1980年代末以降は低レベルにとどまっているが、会議派へ回帰する可能性もある。それゆえ選挙のたびに支持を再び得ようとするアピールが繰り返されてきた。2007年州立法議会選挙の選挙綱領でも少数派への警察や行政の配慮、人権委員会の強化、コミユナル暴動への断固たる対処、ムスリムへの留保制度の適用、ウルドゥーの重視、ムスリム民事法 (Muslim Personal Law) の堅持、家内工業の保護などを唱えムスリムに強くアピールしている (Uttar Pradesh Congress Committee [2007: 19-23])。この点はグジャラート州の2007年州立法議会選挙における会議派の綱領とは顕著な違いである。

以上のように UP 州では政党とコミュニティの系列化が近年ははっきりとしてきたことにより、選挙では激しい競合状況が続いている。そのため BJP を除く主要政党はムスリムの支持を得ようと激しく競い、とくに社会主義党においてはムスリム大衆の支持を失うまいとする懸命な姿勢がうかがわれる。このような状況が BJP を除く主要政党にとってはムスリムの要求を無視し

えないものになっている。また、系列化のもうひとつの効果として、SCなど社会的には弱い立場にあるカーストが政治的に高カーストなどから独立になったことが重要である。それは大衆社会党の成長と不即不離の関係にあるのであるが、それによってヒンドゥー・ナショナリズムの影響やコミユナル暴動への動きが低カーストへ拡散する可能性が大きく減じたと考えられるからである。大規模なコミユナル暴動が1993年以降みられないのは、以上のような政治状況の変化によると考えられる。

結論

本章のまとめとして以下の点が挙げられる。

まず、大規模なコミユナル「暴動」は複合的な暴力の発動であり、その地域のコミュニティの構成など複雑な要素に影響されるため一般化は難しいが、全般的傾向として、1970年代までの暴動は突発的イベントや宗教的行事あるいは都市の犯罪組織間の暴力などが発端になって起こる「自然発生的」な性格が強かったといえよう。しかし、それは1980年代以降、より組織的な「暴動」へと変化してきたことが指摘できる。そのひとつの要因はヒンドゥー・ナショナリスト勢力の長年の運動、とくにアヨーディヤー運動が両宗派間の政治社会的亀裂を先鋭化させたからである。そしてさらに次の2点が「暴動」を組織的で大規模なものとした。すなわち、「ヒンドゥー・ナショナリスト勢力の関与」と「警察など治安機構のヒンドゥーへの偏向」という2つの条件である。この2つが小集団間の暴力をヒンドゥー対ムスリムというコミュニティ間の大規模な「暴動」に発展させる要件となる。ただし、この2つの条件が加わった後の「暴動」とは多数派ヒンドゥーによるムスリムなど少数派へのほとんど一方的な暴力の行使となる。またこの2つの条件はプラスのいう「制度化された暴動システム」の要件を實際上満たすことになる。その意味で1992～93年のマハーラーシュトラ州ムンバイの暴動の第2波と2002年の

グジャラート州の暴動は「制度化された暴動システム」といってよいであろう。

マハーラーシュトラ州では SHS が第 2 波の暴動で組織的にムスリム攻撃の先頭に立ち、かつ、現場の警察は SHS の影響力を強く受け、暴動への有効な抑止力とならなかったし、ムスリムを襲撃する例もあった。また、グジャラート州では VHP/BD/BJP などがゴードラ事件を契機に組織的にムスリムを襲撃した。警察は初期においては多くの場合傍観者であったし、ムスリムを襲撃した例もある。以上のような要因はヒンドゥー多数派の暴力が圧倒的に有利になる状況を作り出す。そのため両州とも犠牲者はムスリムが約 8 割となったのである。

しかしマハーラーシュトラ州とグジャラート州を比べると後者のほうが暴力はより組織化され広範囲なものになっている。そのような違いを生み出した要因は前者では州政府が会議派であったのに対して後者では BJP が州政権についていたからである。マハーラーシュトラ会議派州政府は暴動に有効に対処できなかったが、しかし、暴動に積極的に加担したわけではない。それに対してグジャラート州ではモディ BJP 政権はサング・パリヴァールの暴力を見過ごす以上のことをしたと考えられる。

次に「大規模」なコミューナル暴動が抑制される要因を、UP 州の例をほかの 2 つの州と比較することによって整理する。UP 州では 1990 年代初めまで比較的規模の大きいコミューナル暴動を経験してきた。しかし、1992 年以降は大規模なコミューナル暴動が抑制されている。その大きな原因は政党とコミュニティの「系列化」が進んでいるためと考えられた。BJP 以外の主要 3 政党はムスリムの支持を求めて競合しているため、ムスリムの要求に敏感であらざるをえない。また「系列化」の結果、高カーストは BJP 支持、SC は大衆社会党支持と分裂が顕著でそのためヒンドゥー・ナショナリズムが SC など低カーストなどに拡散しにくいと考えられる。したがって BJP 以外の政党が政権の座にあれば、それらの政党はこの 2 つの要因からコミューナル暴動が拡大する可能性を放置しない。それはとくにムスリムの支持が死活問題で

ある社会主義党であてはまる。

対照的にグジャラート州の場合以下の3つの状況がある。ひとつはムスリムを除けばBJPと会議派の2大政党とカーストの関係はかなり流動的で、系列化が進んでいないことである⁸⁷⁾。2番目はヒन्दゥー・ナショナリズムがSCやSTも含め一定程度浸透している点である。そして3番目はムスリムの人口比が約9%と小さいことである。まずヒन्दゥー・コミュニティの政党支持が流動的である場合、会議派は仮にムスリムの利益を考慮して反ヒन्दゥー・ナショナリズム的な要求を前面に出すと、9%というムスリム人口比以上の反発をヒन्दゥー有権者に引き起こし、選挙では差し引き支持率がマイナスとなる可能性が高い。したがって会議派としてはムスリムの要求に積極的には対応できない。よって、社会的亀裂の深刻化という大きな問題が存在するにもかかわらず、州の政党政治においては「ムスリム問題」は大きく取り上げられない。このような状況はマハーラーシュトラ州でも存在するが、グジャラート州ではBJPが州政権についているがゆえにより鮮明に現れている。

最後に、大規模なコミユナル暴動は両宗派間の社会的亀裂を深化させ、ヒन्दゥー大衆をヒन्दゥー・ナショナリズムの方向に偏向させ、ヒन्दゥーの支持をBJPへまとめるとともに、またコミユナル「暴動」の可能性を高めるといふ悪循環が生まれうるのがグジャラート州の例で示された。もともと、州政府につけばBJPは責任与党としてコミユナル暴動の可能性を無制限に放置できないので、そこには一定の限界が生じざるをえない。

以上が本章のまとめであるが、それをさらにまとめると、以下の3点が「制度化された暴動システム」としてのコミユナル「暴動」が大規模化する要件となろう。すなわち、(1)ヒन्दゥー・ナショナリズムが浸透し、宗派間の社会的亀裂が先鋭化している社会状況（政府職員が多数派の宗派へ偏向している状況も含む）、(2)州政治においてBJPなどヒन्दゥー・ナショナリスト政党が有力政党として存在し、コミユナル暴動が起こることによってそれらの政党に何らかの有利な状況が生まれることが期待できる状況、(3)ムスリム

など少数派の利益が主要政党に反映されない状況、である。これらが典型的にあてはまったのが、グジャラート州であった。反対に「系列化」現象によって(3)の条件がみたされず、そのため抑制がきいているのがUP州であると考えられる。またUP州では過去に大きな暴動と社会的混乱を経験しておりそのマイナスの経験が累積的に学習されている面があるため(1)に関して社会的亀裂の先鋭化は現在一定程度抑えられているし、また、コミューナル暴動が起こってもBJPには必ずしも州政治、とくに選挙面で有利な状況を作りだせない可能性が高いので(2)についてもあまりあてはまらないと考えられる。最後にマハーラーシュトラ州は両州の中間に位置すると考えられる。

本章は州の比較研究であったが、最後に以下の2点を検討したい。第1点は、3州の分析結果から導き出された結論がインドのほかの州でどの程度一般化できるかという点である。確かに中央レベルでもBJPを中心とする連合政権が1998年と1999年に成立するという状況は、「ヒンドゥー多数派の利益」を考慮せざるをえない政治状況が徐々に広がっていることを示している。そのような状況は大規模コミューナル暴動の責任追及のあり方をみても明らかである。1984年の反シク暴動における会議派大物政治家⁸⁸、1992年12月のアヨーディヤー事件におけるBJP指導部⁸⁹、つづいて起こったムンバイのコミューナル暴動におけるSHS指導部、そして2002年の「暴動」におけるBJPのモディ州首相など、大物政治家の「暴動」への関与は明白であるが、誰一人として起訴され罰を受けていない。しかしながら、1998年と1999年の中央のBJP連合政権は地方政党の協力が前提となっており、そして多くの地方政党はOBCやムスリムを有力な支持基盤としてもつこともあって、ヒンドゥー・ナショナリズムには大きな関心はない。すなわちインド全体としてみれば、ヒンドゥー多数派の利害関係を重視するように一定のシフトはあるが、前述の3要件、とくに(1)と(3)はまだそれほど浸透していない。大規模なコミューナル暴動をひとつの契機として社会的亀裂が深化したグジャラート州はインドではやはり例外的である。

第2に、連邦制の問題である。インドが連邦制を基礎とする民主主義体制

をとる以上、連邦制という観点から本章の問題を捉えることも重要であろう。連邦制は州レベルでは政体のコンパートメント化であり、それによってグジャラート州では「ヒンドゥー多数派の専制」がほかの州からのそれほど大きな干渉を受けずに成長できたが、逆に同州からほかの州へも影響を及ぼすことが難しい。連邦制はそのように問題を局地化するるのであるが、そのような問題を解決できるのは上位の政府である中央政府である。しかし中央政府の実際の行動は中央と州で政権与党がどのような組み合わせになるかで違ってくることが問題になる。たとえば、1992年12月のアヨーディヤのバブリー・マスジッドがヒンドゥー・ナショナリスト勢力によって破壊されコミューナル暴動が広がったとき、中央のラーオ会議派政権はただちに BJP 支配州を大統領統治によって中央のもとにおき、事態をコントロールしようとした。しかし、2002年のグジャラート州の暴動では中央の BJP 連合政権は結局そのような措置をとることを見送った。政権の組み合わせによって問題の対処の仕方が正反対となる事態は民主主義の安定的発展にマイナスであろう。このような政治的にきわめて微妙な問題については、これまでの経験⁴⁰⁾から、中央レベルの主要政党間で問題を徐々に一定のコンセンサスに収斂させていくことが問題解決の基本である。その場合、コンセンサスが単に「コミューナル暴動」の抑止に関する中央と州の関係の取り決めであるならば、収斂の可能性は高いであろう⁴¹⁾。しかし、それが「ヒンドゥー多数派」の利益と衝突するものとみなされる場合、容易には成りがたいであろう。

<謝辞>

本章執筆のための現地調査ではムンバイの Centre for Study of Society and Secularism 所長、Dr. Asghar Ali Engineer 氏に助力を得た。また、アーメダバードでは Gujarat Institute of Development Research の Dr. Keshab Das 氏、および、Action Aid 所長の Prasad Chacko 氏に助力を得た。記して謝意を表したい。

[注] _____

- (1) 本章では「コミュニティ」という概念は「カースト」, 「宗派」を含む概念として使う。
- (2) コミュナリズムの歴史的位相については Panikkar ed. [1991: Introduction]。
- (3) 歴史的にみても, 植民地時代からコミュニナリズムとナショナリズムの関係は微妙であった。長崎 [1994], サルカール [1993 (1983)] などを参照。
- (4) 旧不可触民とされ, それがゆえに憲法上, 政治的行政的に優遇措置の対象となる「指定カースト」(Scheduled Castes: SC) や後進的な「指定部族」(Scheduled Tribes: ST) ではないが, しかし, 社会的, 教育的に SC および ST と同様に後進的な社会層を指す。
- (5) 現在ムスリムなど宗教的少数派は新聞などメディアでは「少数派」(minority) という概念で呼ばれている。これは宗派間の緊張状態にあるとき「ムスリム」, 「クリスチャン」など具体的コミュニティ名の暴露が事態を悪化させる懸念があるからである。この措置は1968年の新聞編集者会議で報道倫理として取り決められた (All India Newspaper Editors' Conference [1968])。本章ではとくに断りがなければ「少数派」はムスリムと同義として使う。
- (6) 17世紀にマラーター同盟を創始し, ムガル朝に対して戦った民族的英雄「シヴァージー」(Shivaji) の軍団の意味。1966年設立。「土地の子」(son of the soil) 優先のイデオロギーをもち, 当初は南インドからの流入民, 後にムスリムなどに敵対的となる。Katzenstein [1979], Gupta [1982], Katzenstein et al. [1998], Hansen [2001], Banerjee [2000] を参照。
- (7) ここでの研究レビューは紙面の制約があり十分ではない。よって近藤則夫 [2008] を参照。
- (8) グジャラート州は宗派間の「暴動」が操作され「ヒンドゥー・ナショナリズム」が「人工的」に拡大した「ヒンドゥー・ナショナリズム」の「実験場」とも揶揄される州である。2002年の暴動の資料集としてたとえば Engineer ed. [2003]。
- (9) 1984年のシク教徒によるインディラ・ガンディー首相の暗殺をきっかけとして起こった反シク暴動と1990年代初めまでつづくシク教徒過激派によるテロの応酬も両宗派間の亀裂を深め北部インドを中心にヒンドゥーのアイデンティティを強めることとなった。
- (10) インディラ・ガンディーの長男。1984年末の連邦下院総選挙はインディラ・ガンディー首相の暗殺による同情票のうねりによって会議派は大勝する。暗殺事件がなければ会議派は大勝することはなかったとの推定もあり, この選挙は例外的選挙であったといえる。
- (11) ラジーブ・ガンディー元首相は1991年選挙遊説中にテロで死亡し, ラーオが後継者となった。

- (12) ヒンドゥー・ナショナリスト側では VHP, ムスリム側では All India Babri Masjid Action Committee, そして政府代表の3者による交渉によって妥結をめぐらした。
- (13) “Rath yatra”。山車による示威行進を意味するが、現代ではラーム神のイメージを祭ったトラックに乗っての全国遊説の行進である。その過程で各地で宗派間の緊張を生み出し、しばしば暴動を引き起こした。
- (14) 最高裁は12月6日予定のカール・セーヴァーで寺院関連の建立活動を許可せず州政府もそれを受け入れたことでマスのジッドの破壊など過激な展開は回避されるものと考えた。
- (15) 破壊後、中央政府は VHP, BD, RSS, および、「インド・イスラム協会」(Jamaat-e-Islami Hind), 「イスラム奉仕団」(Islamic Sevak Sangh) をコミュニティな組織として非合法化し、また、BJP が政権についている UP, マディヤ・プラデーシュ, ラージャスタン, ヒマチャル・プラデーシュの各州政府を解任し、大統領統治により中央政府のもとにおいた。
- (16) 1995年までは“Bombay”であった。本章では簡便のため1995年以前についても名称は「ムンバイ」を使用。
- (17) “Progressive Democratic Alliance”, 後に会議派に合流。
- (18) 1996年の連邦下院総選挙で BJP は第1党となりいったんは政権についた。しかし、議席数は過半数に遠く及ばず、また、他党の協力も得られなかったため、13日間だけの政権におわった。その後を継いだのは「統一戦線政府」(United Front) である。
- (19) 委員会の報告書 Government of Maharashtra [1998] = Sr [1998] は Anand ed. [1998] に収録されているものである。同書には州政府がシュリクリシュナ委員会報告に関してどのような行動をとったかその対応を示した, “Memorandum of Action to be Taken (ATR)” = ATR [1998], および, 1970年に Bhiwandi, Jalgaon, Mahad で発生したコミュニティ暴動に関する D. P. Madan 委員会報告の一部も収録している。
- (20) 警察はマハー・アールティーを宗教的行事とみなしたといわれているが、明らかに言い訳である。SHS に配慮して暴動中の外出禁止令のときにさえマハー・アールティーが許された場合がある (Sr [1998: 70])。
- (21) 以上の暴動につづいて1993年3月12日にムンバイではボンベイ証券取引所や航空会社のエア・インディアなどを狙った連続爆破事件が起こり、257名が死亡した。これは無差別テロであることから当初は暴動に無関係とも考えられたが、調査が進むにつれドバイをベースとする密輸業者で犯罪社会の大物である Dawood Ibrahim などムスリムの犯罪者がかかわっている疑いが浮上し、報復という性格が強いものと推定されている。
- (22) インド中央政府内務省は1993年3月には州政府に対してタカレイに何らか

の行動を起こすように要請した。24の提訴のうち、16については州政府は起訴の裁可を出さず、6つについては起訴の裁可を与えたものの後に取り下げ、残りの2つの提訴は係争中となった（Sr [1998: 202]）。暴動に関する1998年までの公益訴訟（public interest writ petition）においてもムンバイ高裁は暴動期間中のタカレイの新聞紙上の扇情的発言を、インド刑事訴訟法（Indian Penal Code）の153条の「特定の宗教コミュニティに対して憎しみを広げる」発言とは認めていない（*Communalism Combat* [1998]）。

- (23) もともとナイクはパワルの後ろ盾を得て州首相となったが、次第に独自性を強めた。パワルはこれを嫌っていた。したがって州首相の交代は権力闘争の意味合いももっていた。
- (24) 1990年の選挙結果は州立法議会288議席のうち、会議派141、BJP42、SHS52であった。
- (25) ここで計算対象としたのは「ムンバイ」選挙区に関しては市街地「大ムンバイ」（Greater Mumbai）市に属する34州立法議会選挙区である。ただし、会議派が候補者を立てていない2つの選挙区は計算から除いた。
- (26) “Mohalla Committee” などといわれる。より上位レベルでは“Peace Committee”などが組織される。地域の警察が組織する場合もある。
- (27) グジャラート州の例はヒンドゥー・ナショナリズムという点でかなり例外的な州である。その歴史的、社会的背景については紙幅の関係で十分説明できないので、たとえばShah [2007]を参照。
- (28) この委員会の報告書は2005年1月に中間報告書（Government of India [2004]）が、2006年3月に最終報告書が提出されている。しかし同年10月には高裁はこの報告書が無効との判決を下している。
- (29) ナナヴァティ委員会報告の第II部は「暴動」を調査する部分である。2008年12月に提出予定であったが、委員会は1年の調査延長を申し出て受理された。11回目の期間延長である（*Hindu*, December 20, 2008）。
- (30) CCTG I [2002], CCTG II [2002]。この事件に関してはさまざまな報告書が出されている。事件後の資料集としてはIndian Social Institute [2002]などがある。しかし、この「市民法廷」の報告が市民による調査としては最大規模のものである。合計2094件の聞き取りや陳述書にもとづいて詳細な報告書を提出している。そのうちの94.5%の証言はムスリムの生き残りからで、4.5%はヒンドゥーからである。暴動の調査という性格上被害コミュニティからの聞き取りのほうが圧倒的に多い。しかし報告書は多くの事実を丹念に検討しており、叙述の信憑性は高いと思われる。
- (31) 「自然発生的」とされる1969年の暴動でも圧倒的犠牲者はムスリムであった。警察の報告にもとづく政府集計では512名の犠牲者のうち430名、すなわち84%がムスリムであった。Government of Gujarat [1971: 180]。

- (32) 以下の *Hindu* の記事を参照, <http://www.hinduonnet.com/thehindu/2002/04/13/stories/2002041308430100.htm> (2002年4月16日アクセス)。
- (33) 連邦上院 (Rajya Sabha) で2005年5月に内務省国務大臣 Sriprakash Jaiswal が明らかにした。ゴードラでの犠牲者も含まれる。2005年5月11日付けの BBC 電子ニュース, http://news.bbc.co.uk/2/hi/south_asia/4536199.stm (2009年1月16日アクセス)。
- (34) たとえばアーメダバードでは Juhapura 地区などへのムスリム住民のゲットー化が進んだ。
- (35) これは暴動が起こった県のデータのみを使って計算した。「暴動による死者」はマイナスの値はとりえない。これは説明変数が切断されているとも考えられる。このように説明変数で「切断」されたサンプルを含むと係数のバイアスが大きくなるものと予想される。よってここでは次善の策として説明変数で「切断」されたサンプルを除く、すなわち、「暴動による死者」=「0」の県は除いて算出した。
- (36) 「大統領統治」(President's Rule) とは憲法第356条にもとづく中央政府による州政府の接管である。中央政府から任命されている州知事は、州政治が憲法に沿って正常に行われていないと判断する場合、中央政府に報告を送る。これにもとづいて中央政府は大統領の名において接管を行う。
- (37) これはある意味ではグジャラート社会の近代化が進んでいるからと考えられる。
- (38) 会議派の国会議員であった、Jagdish Tytler や Sajjan Kumar, およびデリー会議派の指導者、H. K. L. Bhagat などが反シク暴動を扇動したとして指弾されている (Ministry of Home Affairs [2005])。
- (39) 1992年のアヨーディヤー事件を調査するため中央政府によって同年末に設立されたりバーハン委員会 (委員長: M. S. Liberhan 元最高裁判事) は3カ月で報告書を提出するものとされたが、その後、2008年までに47回の延長を重ね、なお提出していない。
- (40) 具体的には中央政府が州政府を接管する「大統領統治」をどうするか、という議論がたどったコースが前例となりうるだろう。この制度は一時期中央政府によって乱用されてきたことから、その適用基準が問題となった。しかし大統領統治は中央政府にとっては便利な介入方法ということもあり、野党が中央政権につくと反対から賛成へと立場を変え、それを支持することがあった。そのため議論は収束しなかったが、それでも乱用を防ぐために徐々に制度的歯止めが追加されるようになってきている。
- (41) たとえば2004年に中央政権に復帰した会議派率いる UPA 連合政権は2005年に「コミューナル暴力 (防止, 抑制, および被害者のリハビリテーション) 法案」を用意した (Ministry of Home Affairs [2005])。同法案はまだ成立してい

ないが、中央政府が州政府を指導できること、首謀者の処断などを含み中央政府が州政府を飛び越えて暴力の抑制に介入することを可能にするものである。

〔参考文献〕

<日本語文献>

- アンダーソン、ベネディクト [1987 (1983)] (白石隆・白石さや訳) 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』リポート (Benedict Anderson, *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, New York: Verso, 1983)。
- ゲルナー、アーネスト [2000 (1983)] (加藤節訳) 『民族とナショナリズム』岩波書店 (Ernest Gellner, *Nations and Nationalism*, Oxford: Blackwell, 1983)。
- 小谷汪之 [1993] 『これからの世界史5 ラーム神話と牝牛——ヒンドゥー復古主義とイスラム——』平凡社。
- 近藤則夫 [1998] 「90年代のインドの政党政治と社会集団——ヒンドゥー主義の衝撃と政党システムの分化——」(近藤則夫編『1990年代インドの政治経済の展開』アジア経済研究所 39-77ページ)。
- [2008] 「インドにおける現代のヒンドゥー・ナショナリズムと民主主義——研究レビュー——」(近藤則夫編「インド民主主義体制のゆくえ——多党化と経済成長の時代における安定性と限界——」調査研究報告書 日本貿易振興機構アジア経済研究所 211-48ページ)。
- 近藤光博 [2002] 「インド政治文化の展開」(堀本武功・広瀬崇子編『現代南アジア3 民主主義へのとりくみ』東京大学出版会 173-194ページ)。
- サルカール、スミット [1993 (1983)] 『新しいインド近代史—下からの歴史の試みII』研文出版 (Sumit Sarkar, *Modern India-1885-1947*, Madras: Macmillan, 1983)。
- スミス、アントニー・D. [1998 (1991)] (高柳先男訳) 『ナショナリズムの生命力』晶文社 (Anthony D. Smith, *National Identity*, London: Penguin, 1991)。
- 内藤雅雄 [1998] 「インドの民主主義とヒンドゥー原理主義」(古賀正則・内藤雅雄・中村平治編『現代インドの展望』岩波書店 49-73ページ)。
- 長崎暢子 [1994] 「政教分離主義と基層文化・ヒンドゥーイズム」(蓮實重彦・山内昌之の編『いま、なぜ民族か』東京大学出版会 81-97ページ)。
- 中島岳志 [2005] 『ナショナリズムと宗教——現代インドのヒンドゥー・ナショナリズム運動——』春風社。

ホブズボーム, E・J・[2001 (1990)] (浜林他訳) 『ナショナリズムの歴史と現在』
大月書店 (E. J. Hobsbawm, *Nations and Nationalism since 1780*, Cambridge:
Cambridge University Press, 1990)。

<ヒンディー語文献>

Bahujan Samaj Party [n.d. a] *Muslim Samaj jara soche, samjhe aur tab apne vote ka istemal kare-Bahujan Samaj Party dwara Apeal* [ムスリムの皆さん、ちょっと考えてよく理解してあなたの票を投じてください—大衆社会党によるアピール], Lucknow: Vimal Printers.

— [n.d.b] *Bahujan Samaj ke sath-sath Savarna Samaj ka bhi hit, BSP men hi Surakshit kyon* [大衆とともにこそサヴァルナの社会の利益があり、大衆社会党においてこそ安全である], New Delhi: Taj Printers.

Samajwadi Party [2004] *Lok Sabha Chunav 2004-Samajwadi Party ka Ghoshna Patra* [2004年連邦下院選挙—社会主義党の選挙綱領], Lucknow: Vimal Printers.

— [2007] *Uttar Pradesh Vidhansabha Chunav 2007-Samajwadi Party Ghoshna Patra* [ウツタル・プラデーシュ2007年州立法議会選挙—社会主義党選挙綱領], Lucknow: Vimal Printers.

Uttar Pradesh Congress Committee [2007] *Uttar Pradesh ka Vikas aur Samman Ap ke Hath-Chunav Ghoshna Patra 2007* [ウツタル・プラデーシュの発展と尊敬はあなたの手には—2007年選挙綱領], New Delhi: Jain Brothers.

<英語文献>

All India Newspaper Editors' Conference [1968] "Code of Ethics for the Press in Reporting and Commenting on Communal Incidents," <http://www.mmc2000.net/docs/leggi/INDIA.pdf> (2009年1月9日アクセス).

Anand, Javed ed. [1998] *Damning Verdict*, Mumbai: Sabrang Communications & Publishing.

Andersen, Walter K., and Shridhar D. Damle [1987] *The Brotherhood in Saffron: The Rashtriya Swayamsevak Sangh and Hindu Revivalism*, New Delhi: Vistaar.

Attwood, Donald W. [1992] *Raising Cane: The Political Economy of Sugar in Western India*, Boulder: Westview Press.

Banerjee, Sikata [2000] *Warriors in Politics: Hindu Nationalism, Violence, and the Shiv Sena in India*, Boulder: Westview.

Basu, Amrita, and Atul Kohli eds. [1998] *Community Conflicts and the State in India*, Delhi: Oxford University Press.

Basu, Tapan, Pradip Datta, Sumit Sarkar, Tanika Sarkar, and Sambuddha Sen [1993] *Khaki Shorts and Saffron Flags: A Critique of the Hindu Right*, New Delhi: Orient

- Longman.
- Baxter, Craig [1969] *The Jana Sangh: A Biography of an Indian Political Party*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Beahm, Donald L. [2002] *Conceptions of and Corrections to Majoritarian Tyranny*, Lanham: Lexington Books.
- Béteille, André [1985] *The Backward Classes and the New Social Order: The Ambedkar Memorial Lectures Delivered under the Auspices of the University of Bombay*, Delhi: Oxford University Press.
- Bhartiya Janta Party (Gujarat Pradesh) [2007] *Manifesto of Bhartiya Janata Party, Gujarat Pradesh: General Assembly Election-2007*, Ahmedabad.
- Bidwai, Praful, Harbans Mukhia, and Achin Vanaik eds. [1996] *Religion, Religiosity and Communalism*, New Delhi: Manohar.
- Brass, Paul R. [1984] *Caste, Faction, and Party in Indian Politics, Vol. I: Faction and Party*, New Delhi: Chanakya Publications.
- [1985] *Caste, Faction and Party in Indian Politics, Vol. II: Election Studies*, New Delhi: Chanakya Publications.
- [2003] *The Production of Hindu-Muslim Violence in Contemporary India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Carras, Mary [1972] *The Dynamics of Indian Political Factions: A Study of District Councils in the State of Maharashtra*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Chandra, Kanchan, and Chandrika Parmar [1997] "Party Strategies in the Uttar Pradesh - Assembly Elections, 1996," *Economic and Political Weekly*, 32(5), February 1, pp. 214-222.
- Communalism Combat* [1998] "Crime and Punishment," Mumbai, March, No. 41. p. 36.
- [2002] *Genocide: Gujarat 2002* (Special Reprint), Mumbai, March-April, No. 77-78.
- Concerned Citizens Tribunal-Gujarat 2002 [2002] (CCTG I [2002] とする) "Crime against Humanity Volume I: An Inquiry into the Carnage in Gujarat-List of Incidents and Evidence," <http://www.sabrang.com/tribunal/> (2008年2月10日アクセス).
- [2002] (CCTG II [2002] とする) "Crime Against Humanity Volume II: An Inquiry into the Carnage in Gujarat-Findings and Recommendations," <http://www.sabrang.com/tribunal/> (2008年2月10日アクセス).
- Engineer, Asghar Ali [1988] "Meerut: Shame of the Nation," in Asghar Ali Engineer ed., *Dehli-Meerut Riots: Analysis, Compilation and Documentation*, Delhi: Ajanta, pp. 16-32.

- [2004] *Communal Riots after Independence: A Comprehensive Account*, Mumbai: Centre for Study of Society and Secularism.
- Engineer, Asghar Ali ed. [2003] *The Gujarat Carnage*, Hyderabad: Orient Longman.
- Galanter, Marc [1984] *Competing Equalities: Law and the Backward Classes in India*, Berkely: University of California Press.
- Ganguly, Varsha, Zakia Jowher, and Jimmy Dabhi [2006] *Changing Contours of Gujarati Society: Identity Formation and Communal Violence*, New Delhi: Indian Social Institute.
- Ghosh, Partha S. [1999] *BJP and the Evolution of Hindu Nationalism: From Periphery to Centre*, New Delhi: Manohar.
- Government of Gujarat [1971] *Report of Inquiry into the Communal Disturbances at Ahmedabad and Other Places in Gujarat on and after 18th September 1969* (Chairman: Jaganmohan Reddy), Gandhinagar: Home Department.
- Government of India [2004] *Interim Report of the High Level Committee* (Chairman: Umesh C. Banerjee:), New Delhi: Indian Railway Traffic Service.
- Government of Maharashtra [1998] (ATR [1998] とする) “Memorandum of Action to Be Taken (ATR) by Government on the Report of the Commission of Inquiry Appointed for Making Enquiries into the Incidents of Communal Riots which Occurred in the Police Commissionerate of Mumbai Area during December 1992 and January 1993 and Serial Bomb Blasts Which Occurred on 12th March 1993,” in Javed Anand ed., *Damning Verdict*, Mumbai: Sabrang Communications & Publishing.
- [1998] (Sr [1998] とする) “Report of the Srikrishna Commission: Appointed for Inquiry into the Riots at Mumbai during December 1992-January 1993 and the March 12, 1993 Bomb Blasts,” in Javed Anand ed., *Damning Verdict*, Mumbai: Sabrang Communications & Publishing.
- Gujarat Pradesh Congress [2007] *Congress’s Pledges: Sketch of Gujarat’s Future 2007-2012-Gujarat Assembly Election-2007*, Ahmedabad.
- Gupta, Dipankar [1982] *Nativism in a Metropolis: The Shiv Sena in Bombay*, New Delhi: Manohar.
- Hansen, Thomas Blom [1999] *The Saffron Wave: Democracy and Hindu Nationalism in Modern India*, New Delhi: Oxford University Press.
- [2001] *Violence in Urban India: Identity Politics, ‘Mumbai’, and the Postcolonial City*, Delhi: Permanent Black.
- Hansen, Thomas Blom, and Christophe Jaffrelot eds. [1998] *The BJP and the Compulsions of Politics in India*, Delhi: Oxford University Press.
- Hasan, Zoya [1998] *Quest For Power: Oppositional Movements and Post Congress*

- Politics in Uttar Pradesh*, Delhi: Oxford University Press.
- Indian Social Institute [2002] *The Gujarat Pogrom: Compilation of Various Reports*, New Delhi: Indian Social Institute.
- Jaffrelot, Christophe [1996] *The Hindu Nationalist Movement and Indian Politics 1925 to the 1990s*, New Delhi: Penguin Books.
- [1998] “The Politics of Processions and Hindu-Muslim Riots,” in Amrita Basu and Atul Kohli eds. [1998: 58–92]
- Katzenstein, Mary [1979] *Ethnicity and Equality: The Shiv Sena Party and Preferential Policies in Bombay*, Ithaca: Cornell University Press.
- Katzenstein, Mary Fainsod, Uday Singh Mehta, and Usha Thakkar [1998] “The Re-birth of Shiv Sena in Maharashtra: The Symbiosis of Discursive and Institutional Power” in Amrita Basu and Atul Kohli eds. [1998: 215–238]
- Kaur, Ravinder [2005] “Mythology of Communal Violence: An Introduction,” in Ravinder Kaur ed., *Religion, Violence and Political Mobilisation in South Asia*, New Delhi: Sage Publications, pp. 19–45.
- Kohli, Atul [1990] *Democracy and Discontent: India's Growing Crisis of Governability*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Kondo, Norio [2001] “The Backward Classes Movement and Reservation in Tamil Nadu and Uttar Pradesh,” in Mushirul Hasan and Nariaki Nakazato eds., *The Unfinished Agenda: Nation-Building in South Asia*, New Delhi: Manohar, pp. 361–398.
- Lele, Jayant [1990] “Caste, Class and Dominance: Political Mobilization in Maharashtra,” in Francine R. Frankel and M.S.A. Rao eds., *Dominance and State Power in Modern India: Decline of a Social Order Volume II*, Delhi: Oxford University Press, pp. 115–211.
- Lobo, Lancy, and Biswaroop Das eds. [2006] *Communal Violence and Minorities: Gujarat Society in Ferment*, New Delhi: Rawat.
- Lok Sabha [2004] *Starred Question*, No. 294, dated 21, December.
- [2005] *Unstarred Question*, No. 239, dated 26, July.
- Maharashtra State Minorities Commission [n.d.] *First Report of The Maharashtra State Minorities Commission: For the Period 1st April 2000 to 31st March 2002*, Mumbai: Government of Maharashtra.
- Malik, Yogendra K., and V. B. Singh [1994] *Hindu Nationalists in India: The Rise of the Bharatiya Janata Party*, Boulder: Westview Press.
- Manor, James [1997] “Parties and the Party System,” in Partha Chatterjee ed., *State and Politics in India*, Delhi: Oxford University Press, pp. 92–124.
- McGuire, John, Peter Reeves, and Howard Brasted eds. [1996] *Politics of Violence from*

- Ayodhya to Behrampada*, New Delhi: Sage Publications.
- Ministry of Home Affairs [2005] *The Communal Violence (Prevention, Control and Rehabilitation of Victims) Bill, 2005* (Bill No. CXV of 2005), New Delhi.
- [2007] “Status Paper on Internal Security Situation as on March 31, 2007,” [http://mha.gov.in/internal%20security/ISS\(E\)-050208.pdf](http://mha.gov.in/internal%20security/ISS(E)-050208.pdf) (2007年7月31日アクセス), p. 37.
- Nanavati, G. T. [2005] *Justice Nanavati Commission of Inquiry (1984 Anti-Sikh Riots)*, New Delhi: Ministry of Home Affairs.
- Nanavati, G. T., and Mr. Justice Akshay H. Mehta [2008] “Report by the Commission of Inquiry into the Facts, Circumstances and All the Course of Events of the Incidents that Led to Setting on Fire Some Coaches of the Sabarmati Express Train on 27.2.2002 near Godhra Railway Station and the Subsequent Incidents of Violence in the State in the Aftermath of the Godhra Incident: Part-I (Sabarmati Express Train Incident at Godhra),” Ahmedabad: Government of Gujarat, <http://home.gujarat.gov.in/homedepartment/downloads/godharaincident.pdf> (2009年1月10日アクセス).
- Nandy, Ashis, Shikha Trivedy, Shail Mayaram, and Achyut Yagnik [1997] *Creating a Nationality: The Ramjanmabhumi Movement and Fear of the Self*, Delhi: Oxford University Press.
- Palshikar, Suhas [1996] “Maharashtra-II: Capturing the Moment of Realignment,” *Economic and Political Weekly*, 31(2-3), January 13-20, pp. 174-178.
- Panikkar, K. N. ed. [1991] *Communalism in India: History, Politics and Culture*, New Delhi: Manohar.
- Parikh, Manju [1993] “The Debacle at Ayodhya: Why Militant Hinduism Met with a Weak Response,” *Asian Survey*, 33(7), July, pp. 673-685.
- Rajgopal, P. R. [1987] *Communal Violence in India*, New Delhi: Uppal.
- Rajya Sabha [2005] *Starred Question*, No. 52, dated 26, July.
- Rao, P. V. Narasimha [2006] *Ayodhya: 6 December 1992*, New Delhi: Viking.
- Savarkar, Vinayak Damodar [1989] *Hindutva: Who Is a Hindu?* New Delhi: Bharti Sahitya Sadan (原本は1923年出版).
- Shah, Ghanshyam [1990] “Caste Sentiments, Class Formation and Dominance in Gujarat,” in Francine R. Frankel and M. S. A. Rao eds., *Dominance and State Power in Modern India: Decline of a Social Order Volume II*, Delhi: Oxford University Press, pp. 59-114.
- [1996] “Gujarat-BJP’s Rise to Power,” *Economic and Political Weekly*, 31(2-3), January 13-20, pp. 165-170.
- [2007] “Gujarat after Godhra,” in Ramashray Roy and Paul Wallace eds., *India’s*

- 2004 Elections: Grass-roots and National Perspectives*, New Delhi: Sage, pp. 151–179.
- Shani, Ornit [2007] *Communalism, Caste and Hindu Nationalism: The Violence in Gujarat*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sheth, Pravin [1998] *Political Development in Gujarat*, Ahmedabad: Karnavati Publications.
- Varshney, Ashutosh [2002] *Ethnic Conflict and Civic Life: Hindus and Muslims in India*, New Delhi: Oxford University Press.
- Vora, Rajendra [1996] “Maharashtra-I: Shift of Power from Rural to Urban Sector,” *Economic and Political Weekly*, 31(2–3), January 13–20, pp. 171–173.
- Wilkinson, Steven I. [2004] *Votes and Violence: Electoral Competition and Communal Riots in India*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wilkinson, Steven I. ed. [2005] *Religious Politics and Communal Violence*, New Delhi: Oxford University Press.